

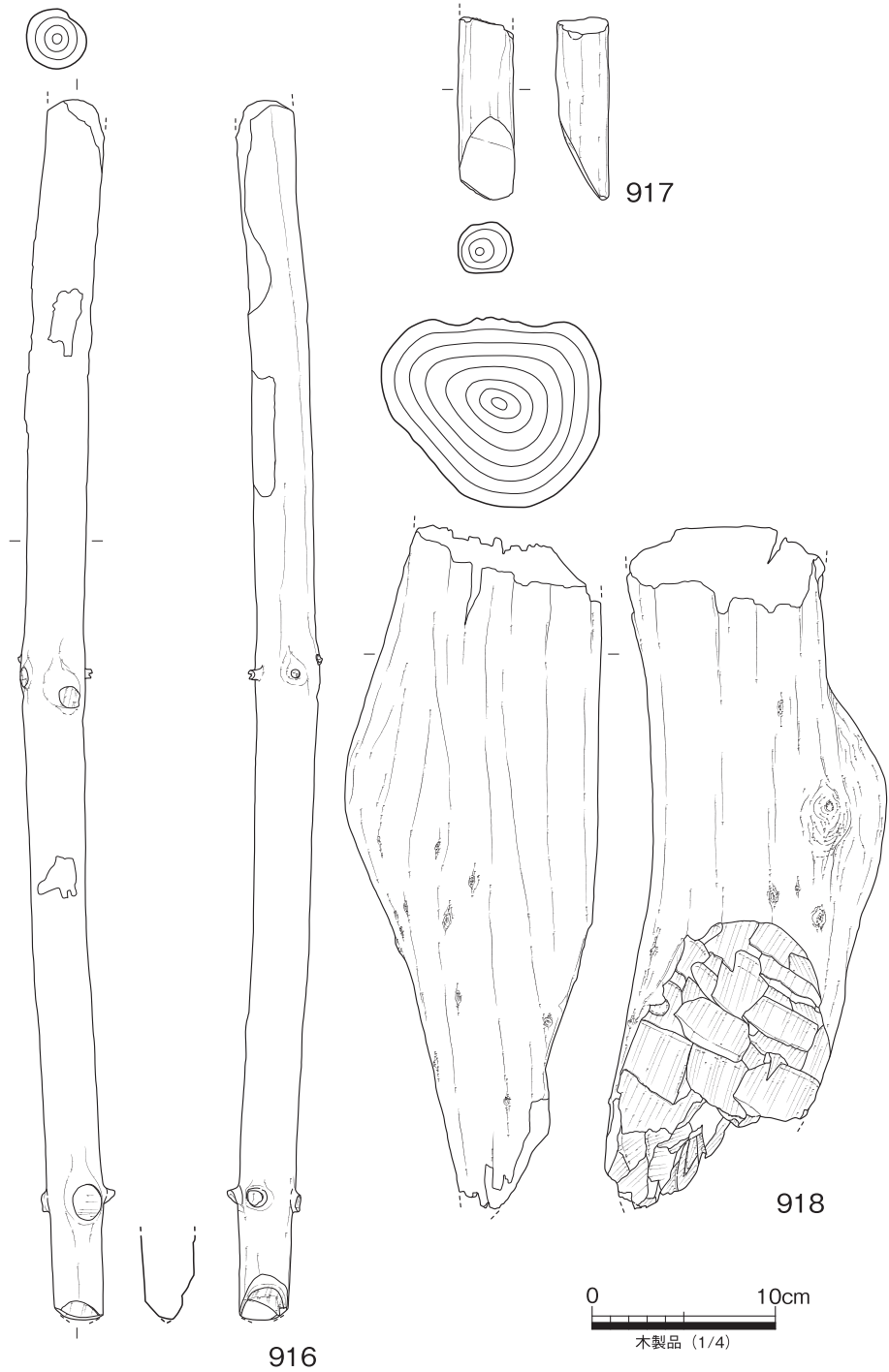
られ、1522～1524は小枝を落としていない。転用材(1526)は建築部材でも柱材の可能性はある。樹種は、マツ属複雑管束亜属(1514～1517、1520～1526)、スダジイ(1518)、カキノキ属(1519)とみられ、これらは直営で同定を行った。

出土した木杭のうち、護岸1の903と908、護岸2の904・909・912・913の計6点について、放射性炭素年代測定(第4章第7節参照)を実施した。結果、護岸1の2点と護岸2の904が、概ね14世紀中葉～末、護岸2の残り3点が14世紀前葉～中葉の年代値が得られた。

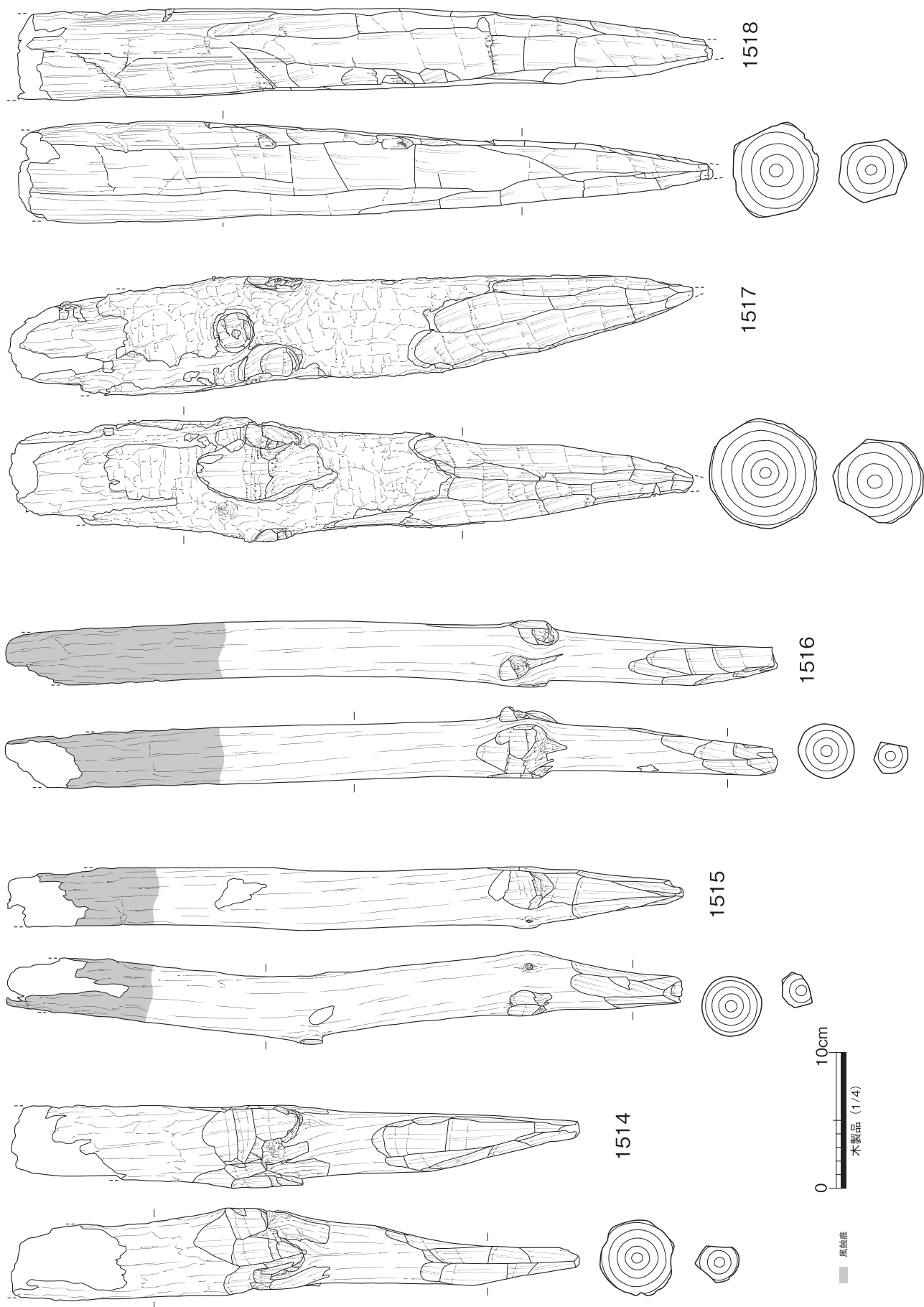
SG04は、西半に上述したSG03が再掘され、南端部は調査区外へ延長する。調査範囲より、平面形は径約5.7mの不整円形状を呈す

ると見られる。残存深0.8m以上、断面形は概ね逆台形状を呈するとみられる。埋土は、3層以上に細分され、灰色系ないし黒色系粘土が水平堆積していた。上層(第147図下13層)と下層(同図14・15層)の2層に大別する。上層には、多量のブロック土が混入しており、SG03を開削するにあたり、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

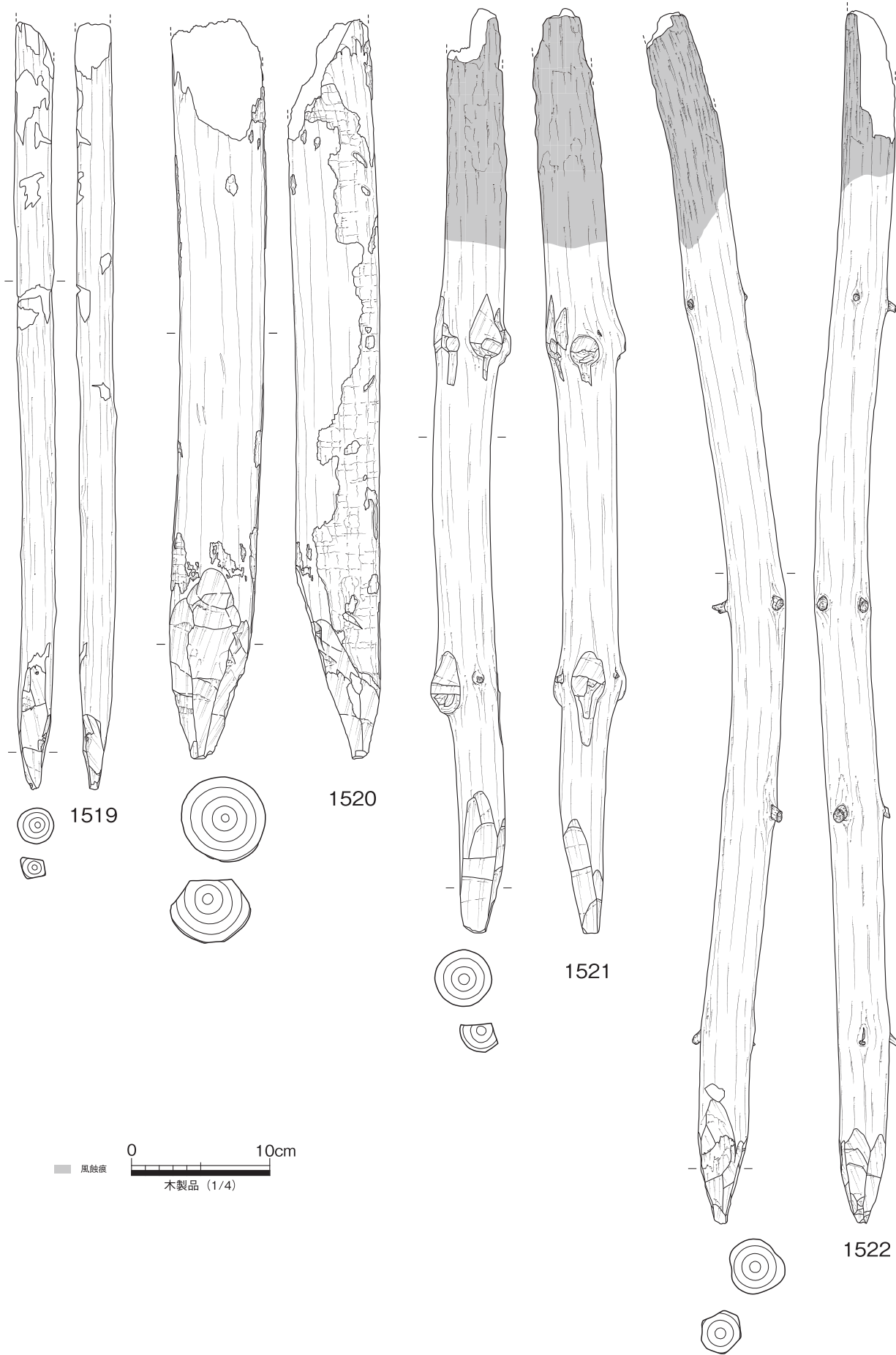
SG04の護岸杭列は、遺構の北半部の掘り方肩部より1.2m程度内側に、直線状に2列に打設され、東端付近で南東に折れて8点程度が確認された。木杭は既述したSD093との重複部分を中心に打設されており、軟弱な重複部分の掘り方法面を保護することに、まず注意が払われていたのであろう。なお、



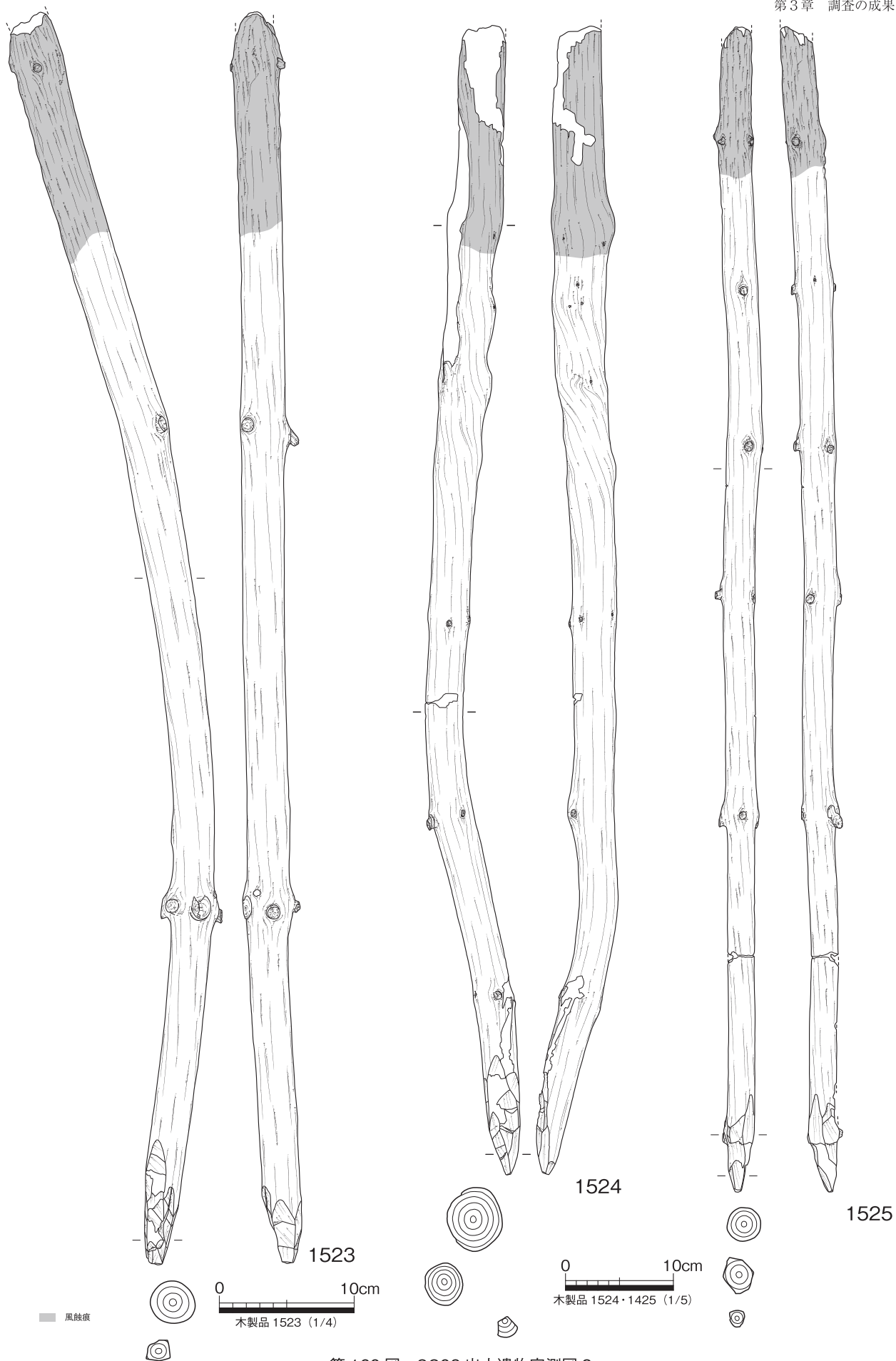
第157図 SG03出土遺物実測図5



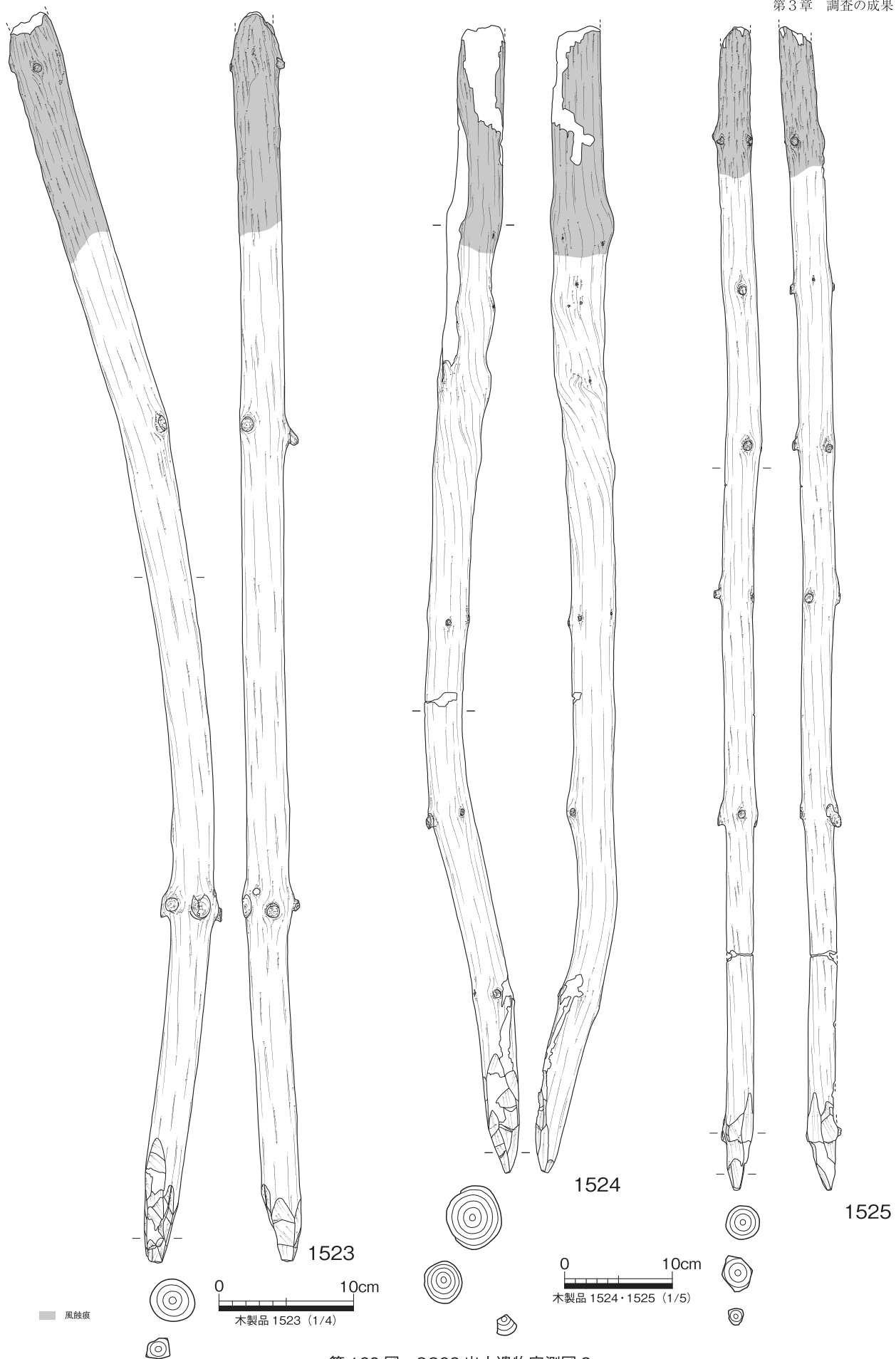
第 158 図 SG03 出土遺物実測図 6



第 159 図 SG03 出土遺物実測図 7



第160図 SG03 出土遺物実測図8



第160図 SG03 出土遺物実測図8

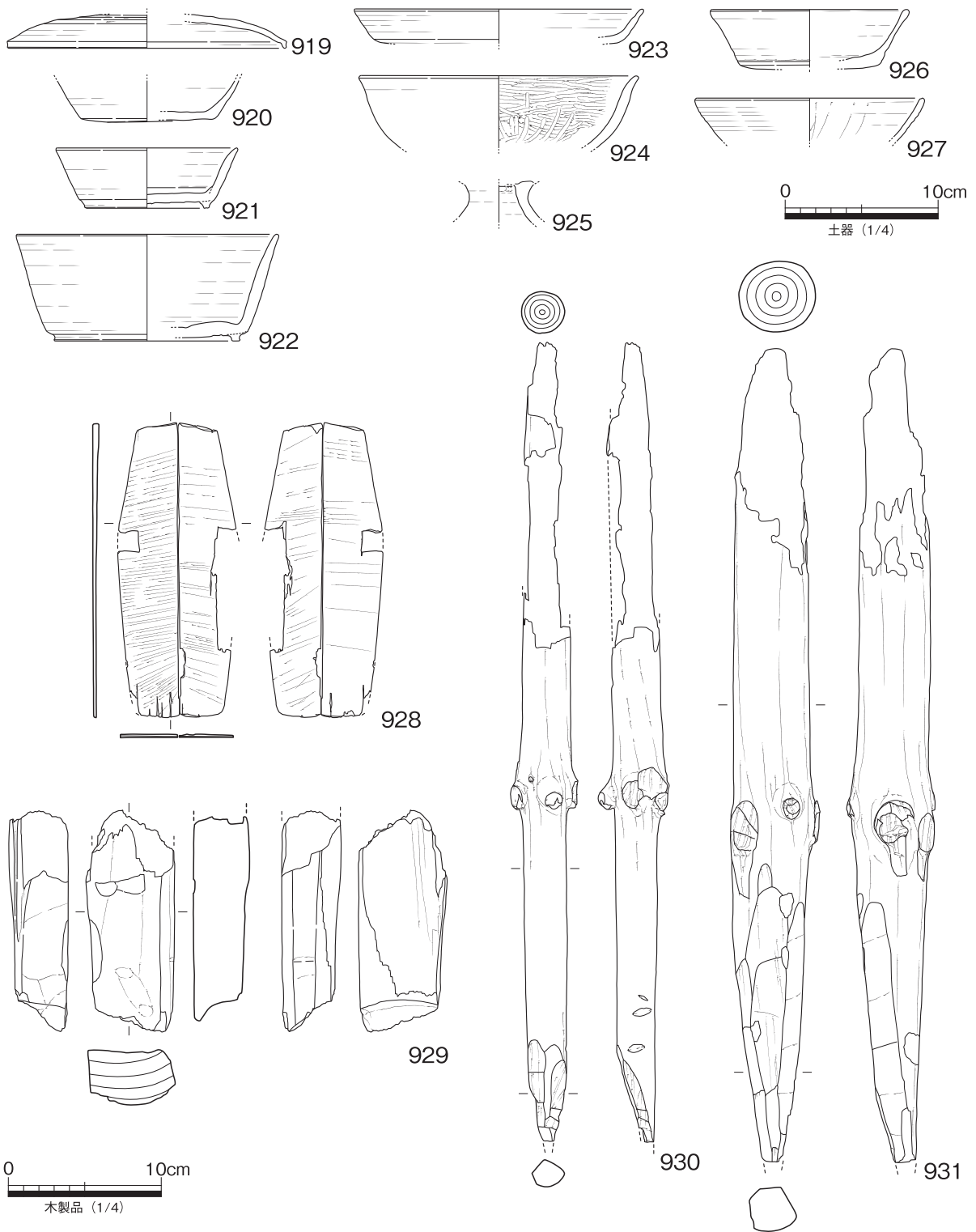
第146図に示されたように、SG03の北辺部の杭列の一部も、本遺構に帰属することが記録されているが、そのように判断した根拠は不詳である。なお本遺構の木杭についても番号は振られておらず、各杭の詳細な出土位置については不詳である。

遺物は図示した以外に、弥生土器や土師器、須恵器、土師質土器等の小片がコンテナ3分の1程度出土した。いずれも器種不詳の小片が多数を占める。919～949は、SG04出土の遺物である。919は須恵器蓋。外面天井部から口縁部にかけて自然釉がかかる。920～922は同杯である。920と922は、上述したSG03出土資料と接合した。921は、底部と口縁部を接合する際に、内面に段状の明瞭な接合痕を残す。923は同皿。小片のため、復元値にはやや難がある。924は黒色土器碗。外面はマメツが顕著だが、おそらくA類碗と考える。内面見込みから体部にかけて放射状のミガキを施す。925は、土師質土器台付杯の脚台部片として図示した。以上の資料は、概ね12世紀前半代を下限とする時期に位置付けられ、SD093からの混入の可能性を考える。926は土師質土器杯。2次的な被熱のためか、やや顕著に変色が見られる。927は、十瓶山周辺窯産須恵器碗の口縁部片。内外面ミガキ調整は施されない。

928～949は木製品である。928は、図上端と左右側縁に稜角を有する板材である。大きく左右2片に折損し、さらにいくつか小片化していたが、図示したような形状に復元可能と判断した。用途は不明。材はモミ属(第4章第3節参照)である。929は側面に加工を施した板状の端材であろう。樹種はスダジイ。930～949は木杭である。多くは梢頭の方を下にして先端部を加工し、打設されていた。948のみ、上端部が炭化する。樹種は、930・931・936～938・941～943・945・948はマツ属複雑管束亜属、932・947はヒサカキ、933・934・944はクリ、935はトネリコ属シオジ節、939はモモ、940はコナラ属コナラ節、946はクスノキ科、949はエノキ属であった。針葉樹と広葉樹は掲載資料では同数であるが、そもそも資料数が乏しいため、上述したSG03の樹種組成と単純には比較できない。SG03と比して、広葉樹の樹種に多様性がある点は注意される。木杭は、最大径2.7～8.2cmの枝を払ったのみの芯持ち丸木材を中心に、940や944のようなミカン割り材が併用されている。上述したSG03と比して、径5cmを超える太い材が多数を占める点も相違する。下端部は、SG03同様に複数方向より削り、断面多角形状に尖らせるものが多い。また上端部はいずれも折損しており、残存長は最も長い946で89.1cmであった。そのほか護岸1杭列周辺より、モモの自然木1点が出土している。



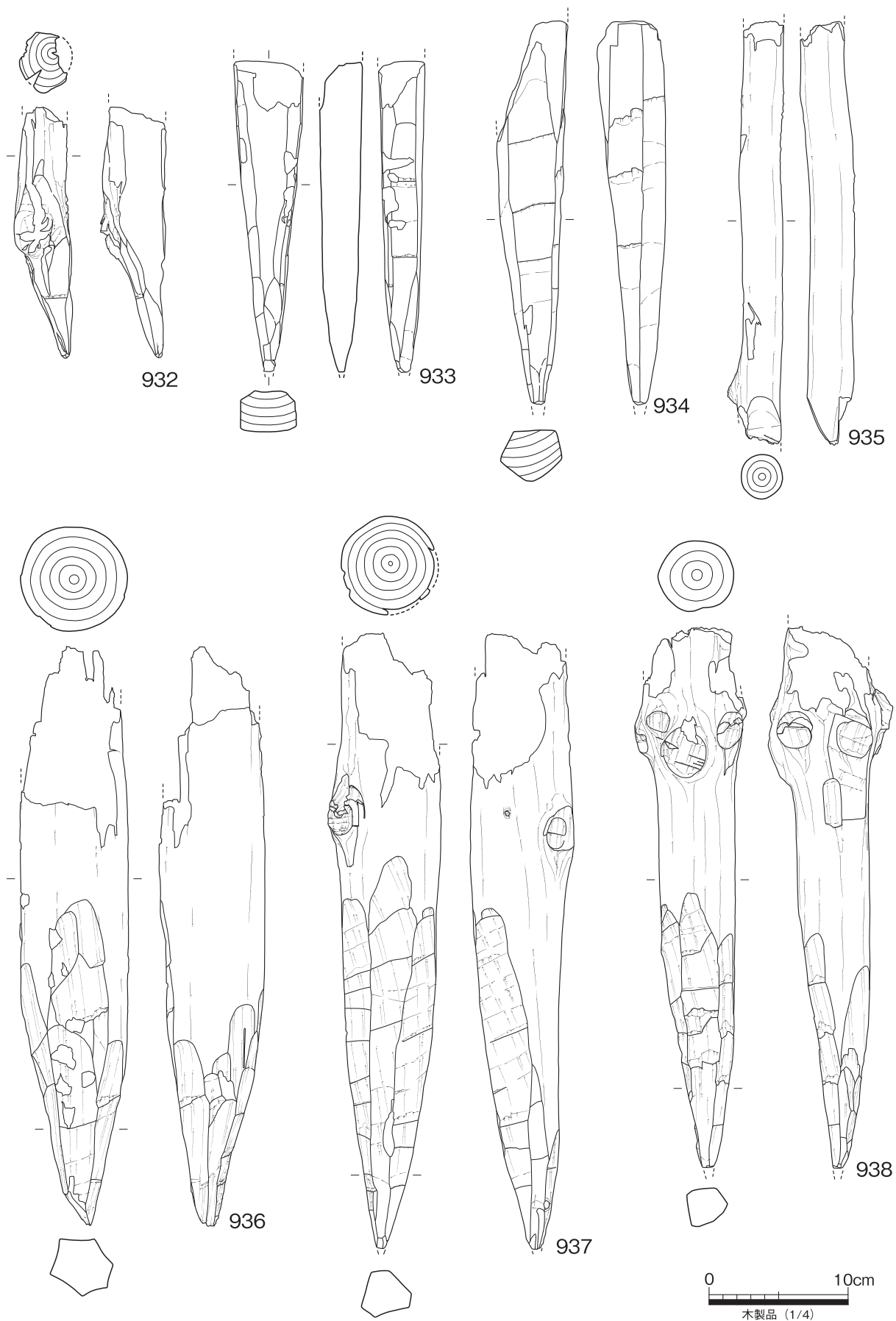
第161図 SG03出土遺物実測図9



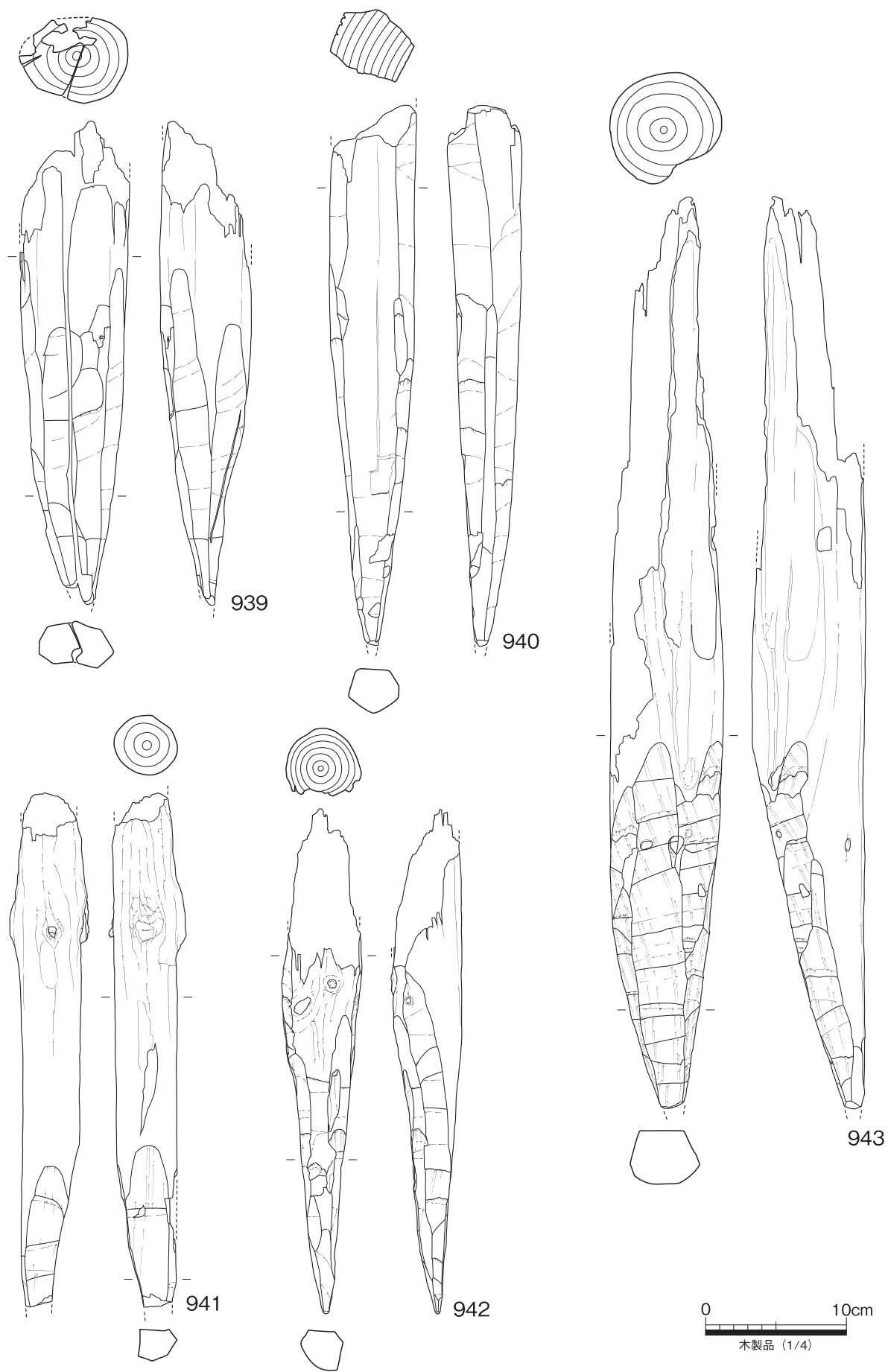
第 162 図 SG04 出土遺物実測図 1

1527～1538 は追加で図化した護岸材である。1528～1538 は上方に炭化部が認められる。樹種は、マツ属複維管束亜属（1527・1528、1530～1538）、ツガ属（1529）と推定され、これらの同定は直営で実施した。

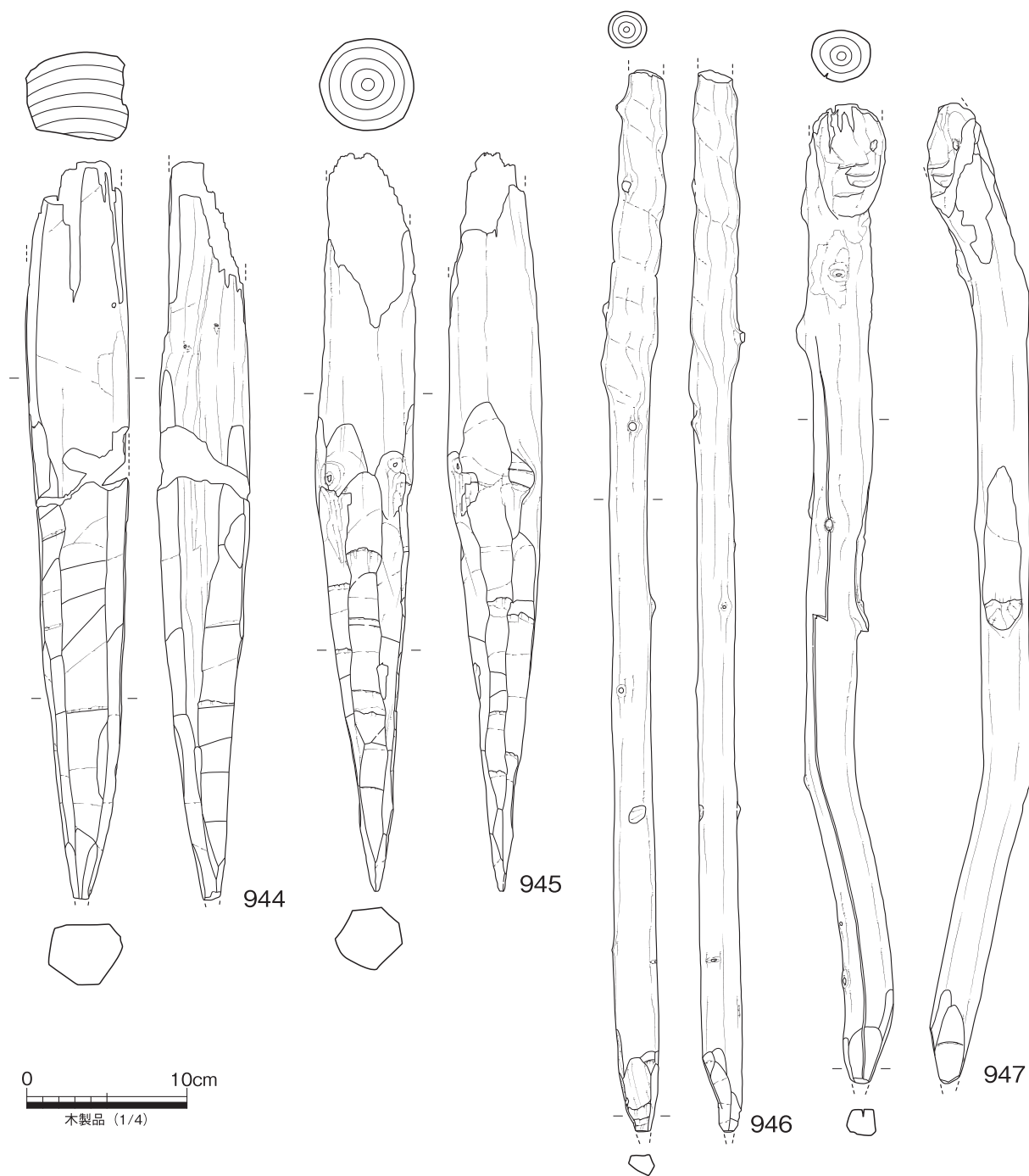
SG04 出土木杭についても、内側杭列の 5 点について、放射性炭素年代測定（第 4 章第 7 節参照）を実施した。結果、930 と 949 の 2 点が概ね 13 世紀後半～14 世紀初頭、残りの 936・937・943 の 3 点



第 163 図 SG04 出土遺物実測図 2



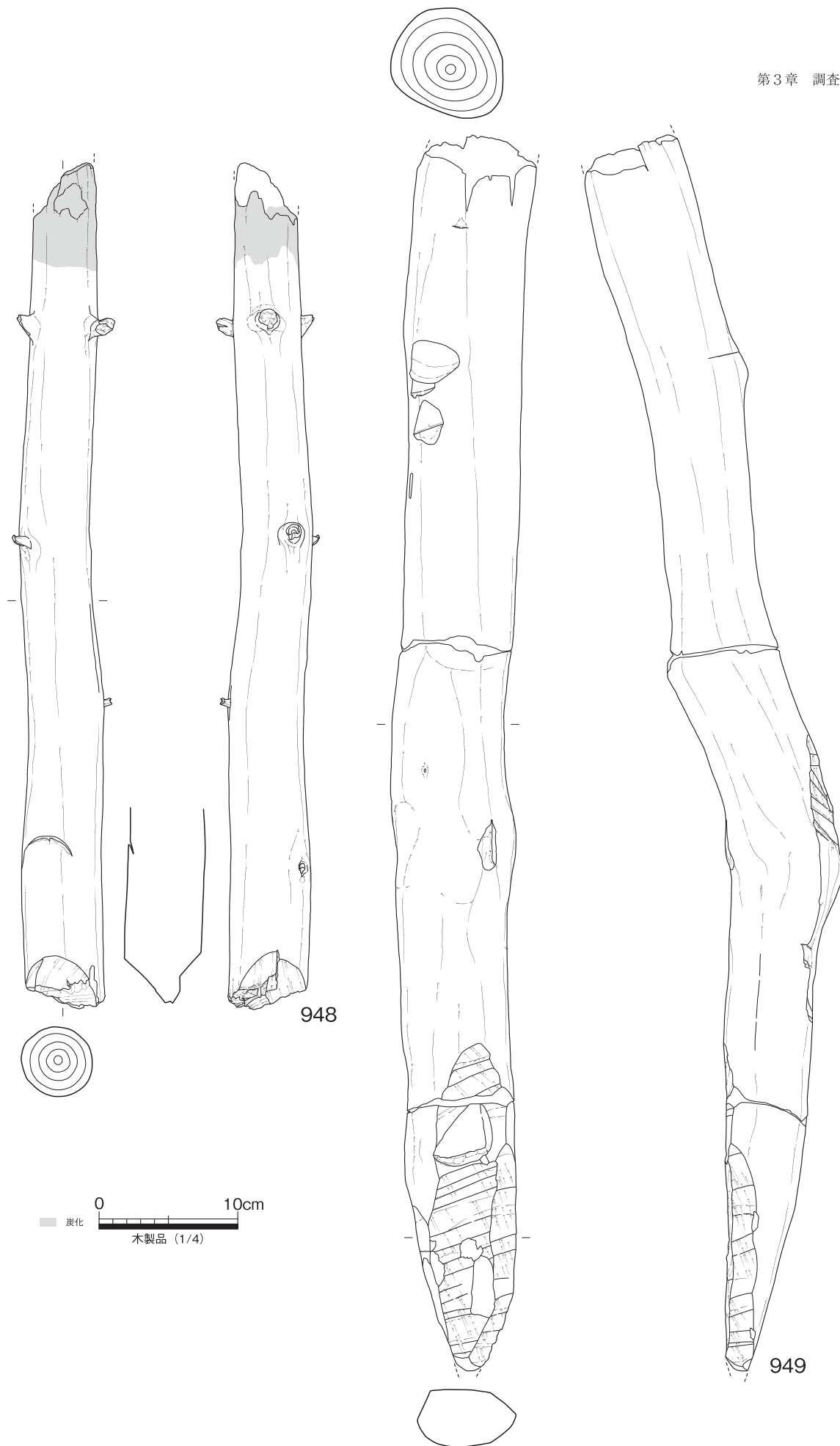
第 164 図 SG04 出土遺物実測図 3



第 165 図 SG04 出土遺物実測図 4

が 14 世紀中葉～末の年代値が得られた。後者は、上述した SG03 護岸 1 や護岸 2 より出土した木杭の年代値と同一であり、おそらくは SG03 の木杭を本遺構のものと誤認した可能性が考えられる。

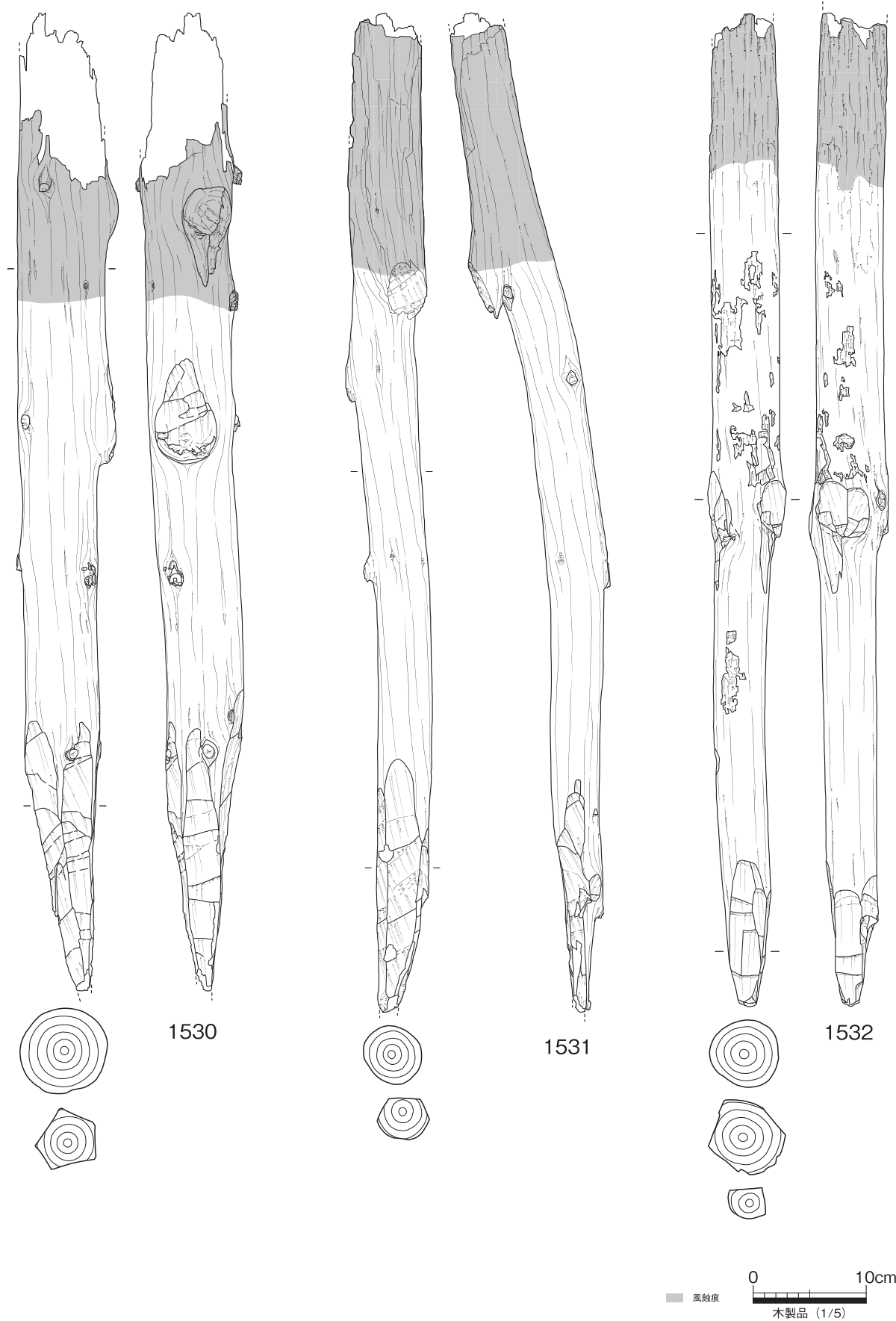
本遺構出土の土器資料については、上述したように重複する遺構からの混入が多数を占め、直接本遺構の年代を示す資料に乏しい。土師質土器杯等や上述した木杭の放射性年代測定年代値より、13 世紀後半代の開削の可能性を想定するにとどめたい。



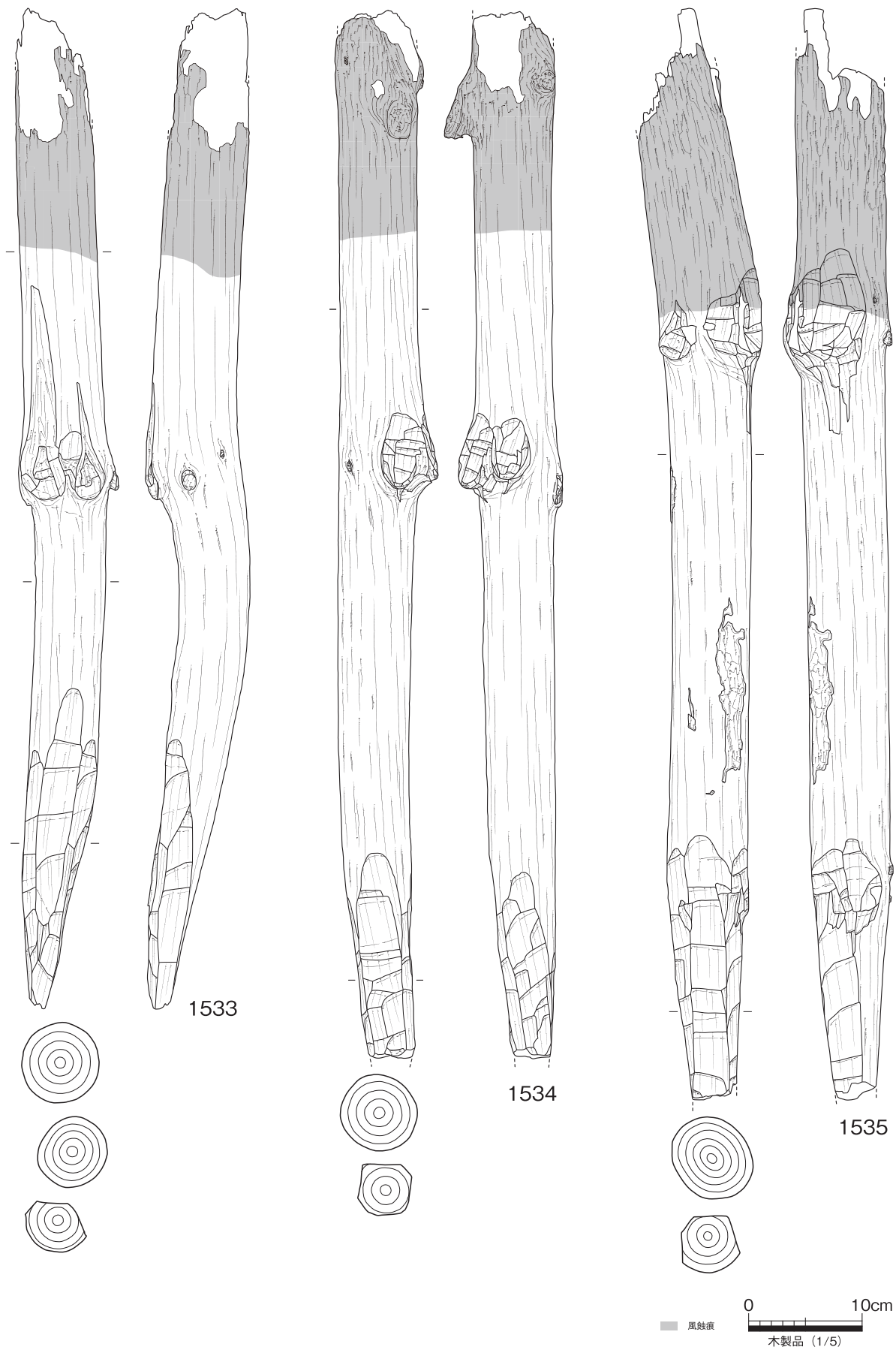
第 166 図 SG04 出土遺物実測図 5



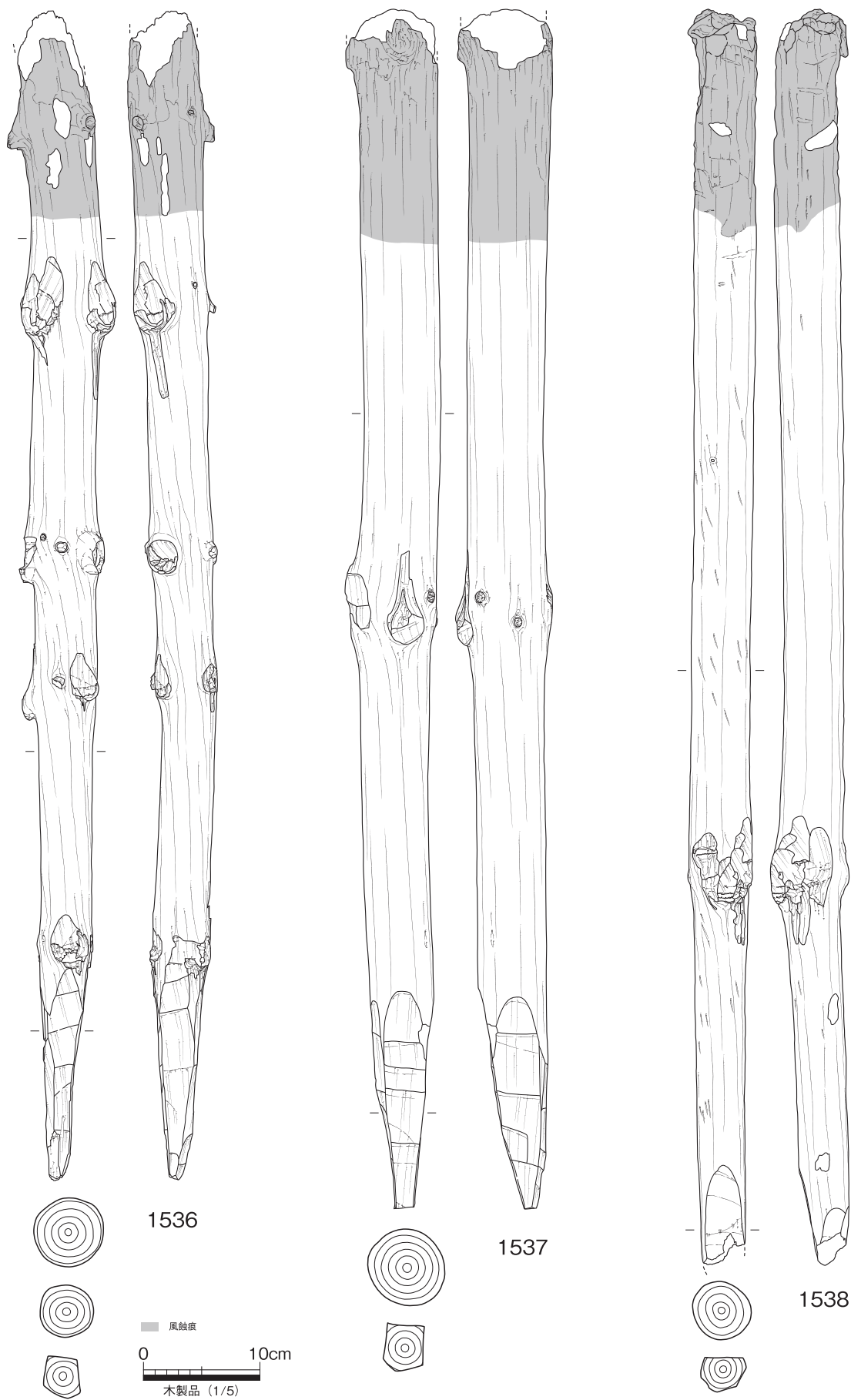
第 167 図 SG04 出土遺物実測図 6



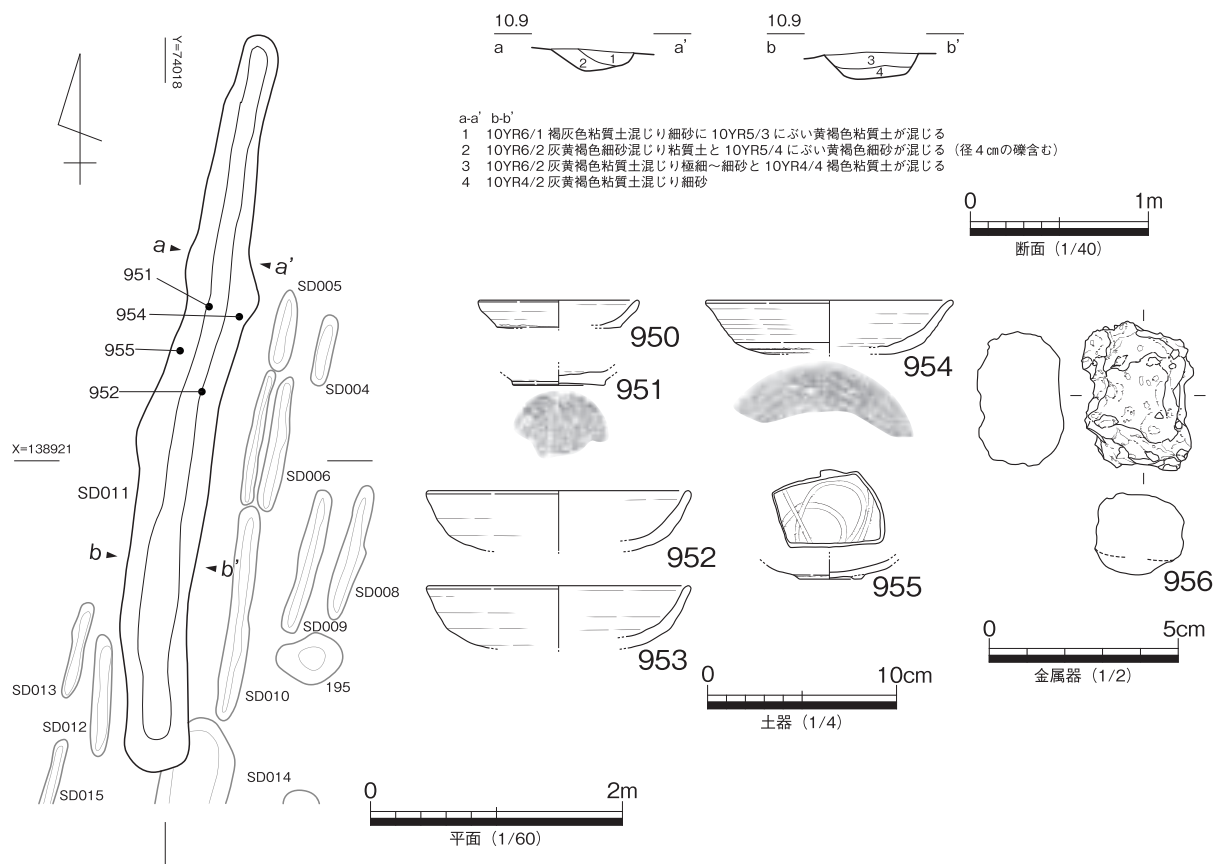
第 168 図 SG04 出土遺物実測図 7



第 169 図 SG04 出土遺物実測図 8



第 170 図 SG04 出土遺物実測図 9



第 171 図 SD011 平・断面・出土遺物実測図

溝

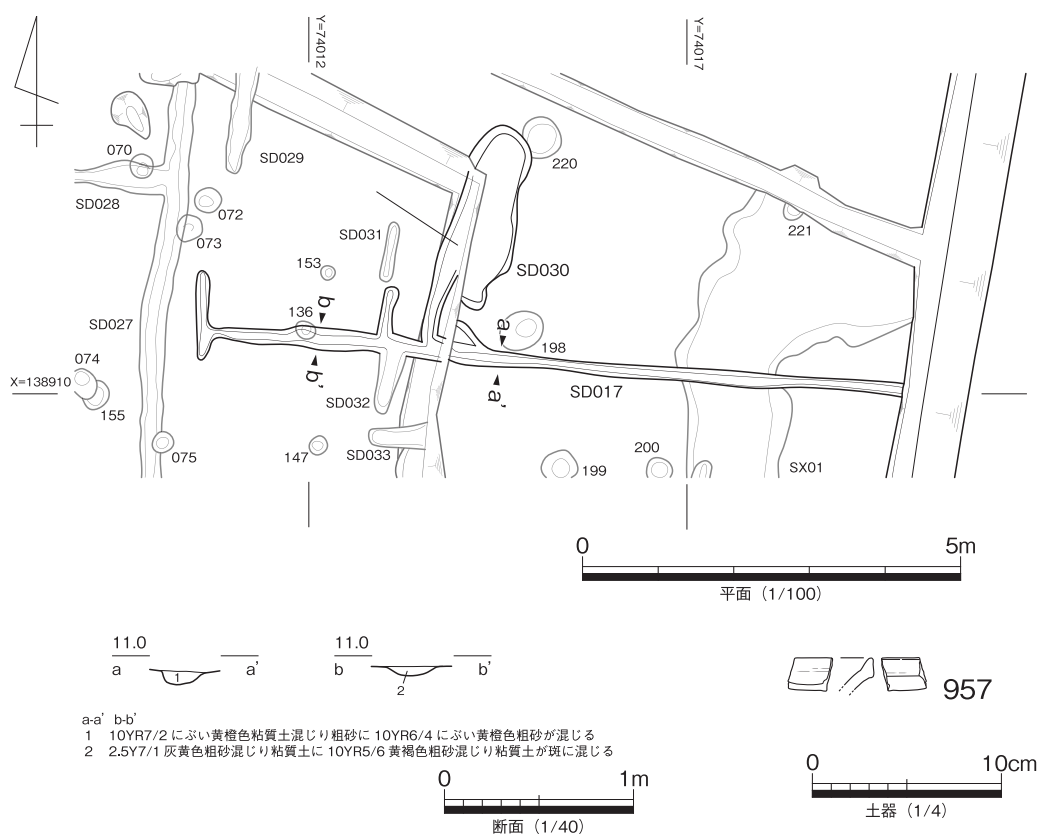
SD011 (第 171 図)

1 区 1 面東端付近で検出した南北溝である。南北両端は調査区内で途切れ、延長約 5.90 m を調査した。重複関係より、SD014 より後出する。検出面幅 0.32 ～ 0.61 m、残存深 0.14 m 前後、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。南端付近でやや南東方向に屈曲するが、溝主軸は概ね N 8.77° E に配される。埋土は 2 層に細分され、灰褐色系粘質土がレンズ状ないし水平堆積していた。溝底面の標高は 10.7 m 前後で一定しており、流下方向は不詳である。

遺物は、図示した以外に土師質土器皿や杯、和泉型瓦器碗、器種不詳の須恵器等の小片が若干量出土した。950 は土師質土器皿。951 ～ 954 は土師質土器杯。951 は、底部は低い平高台状を呈し、糸切り底である。952 と 953 は器表面のマメツが顕著で、調整等は不明瞭である。954 の内外面には薄く煤が付着し、2 次的に被熱した可能性がある。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。955 は、和泉型瓦器碗の底部片である。内面見込みには螺旋状のミガキが施される。956 は椀形鍛冶滓の小片とみられ、底面に炉底粘土が溶着する。出土遺物より本溝は、13 世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD017・SD030 (第 172 図)

SD017 は、1 区 1 面南東部付近で検出した東西直線溝である。溝西半部で南北溝が合流するが、これは重複する鋤溝を一連の溝として誤認した可能性がある。重複関係より、後述する SX01 より後出する。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長する。東西長約 9.4 m を調査した。流路方向 N 85.27



第172図 SD017・SD030 平・断面・出土遺物実測図

°Wに配される。溝は、検出面幅0.2m前後、残存深0.05～0.08m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄色系粘質土の単層である。底面の標高は、10.8～10.9m前後で一定する。

遺物は、図示した以外に器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器皿等の小片10点程度が出土した。957は、東播系須恵器鉢の口縁部小片。端部は上方へ拡張して、断面三角形を呈する。Ⅲ-1～Ⅲ-2類に位置付けられよう。

SD030は、SD017より北へ分岐する検出面幅0.2m前後の小溝で、北端に南北2.33m、東西0.84m、残存深0.08mの平面不整隅丸長形状を呈する浅い落ち込みに接続する。溝は残存深0.07m、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はない。

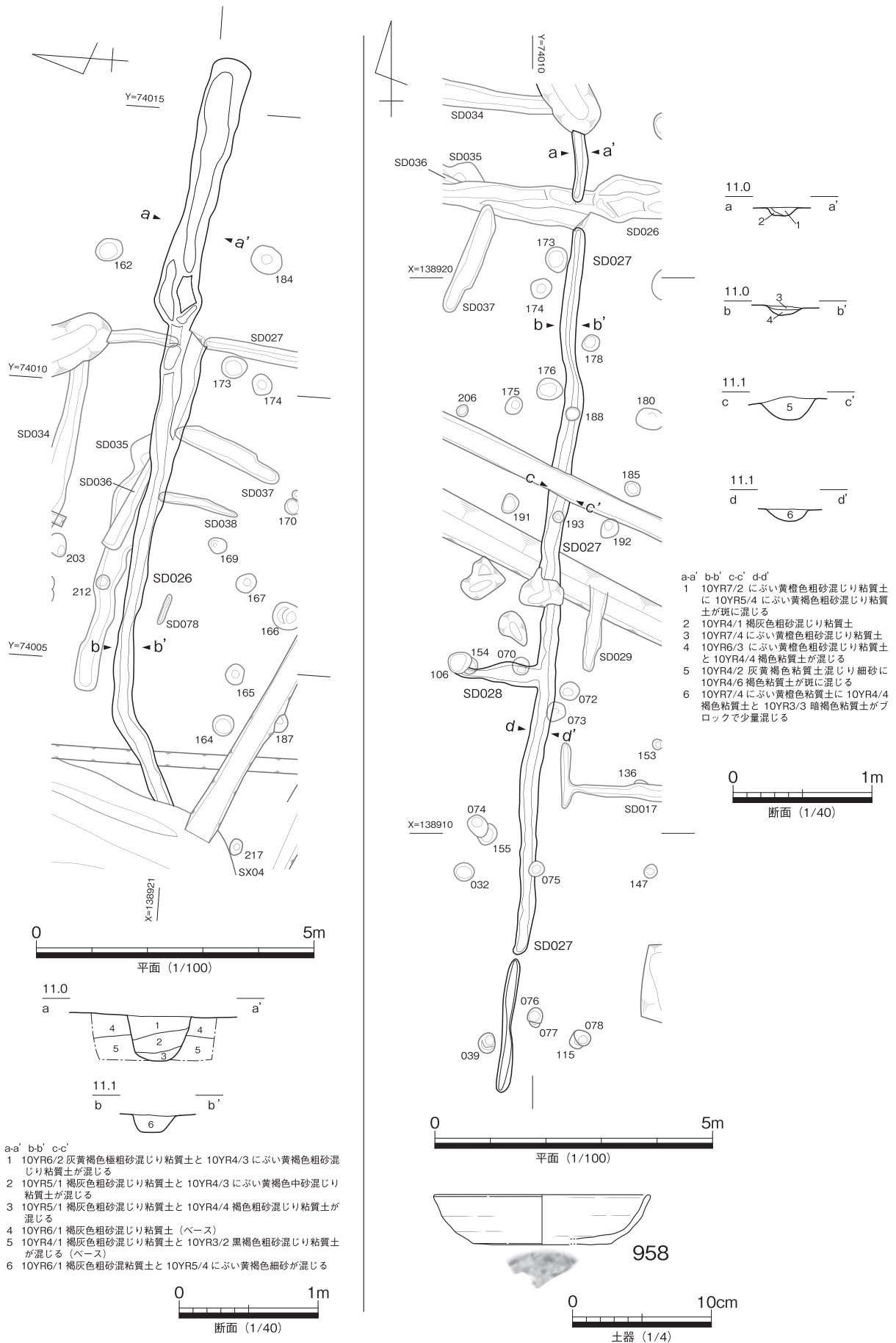
遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿、瓦器等の小片が16点程度出土した、凶化した遺物はない。小片のため詳細な時期を特定することは困難だが、SD017と大きな時期差は認めない。

出土遺物より、本溝は12世紀後半～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

なお、SD017西端より約0.4m西に、SD017と概ね直交して後述するSD027が配されており、溝の規模や埋土、時期が近似することから、SD017とともに区画溝として機能していた可能性を想定する。

SD026 (第173図)

1区1面中央部付近で検出した東西溝で、東端は調査区内で途切れ、西端はSX04に切られる。SX04より西側で延長溝は確認していない。切り合い関係より、SD035より後出し、SD027より先行する。東半部は概ねN84.68°Wと正方位に近く配され、西端付近で南にやや屈曲する。延長約13.7mを調査した。検出面幅0.27～0.60m、残存深0.13～0.32m、断面形は一部に小規模なテラス面が配され2段



第 173 図 SD026 ~ SD028 平・断面・出土遺物実測図

掘りとなるが、概ね皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は1～3層に細分され、主に褐灰色粘質土が水平堆積していた。溝底面の標高は、西端付近で10.73 m前後、東端付近で10.55 m前後をそれぞれ測り、東へ傾斜する。

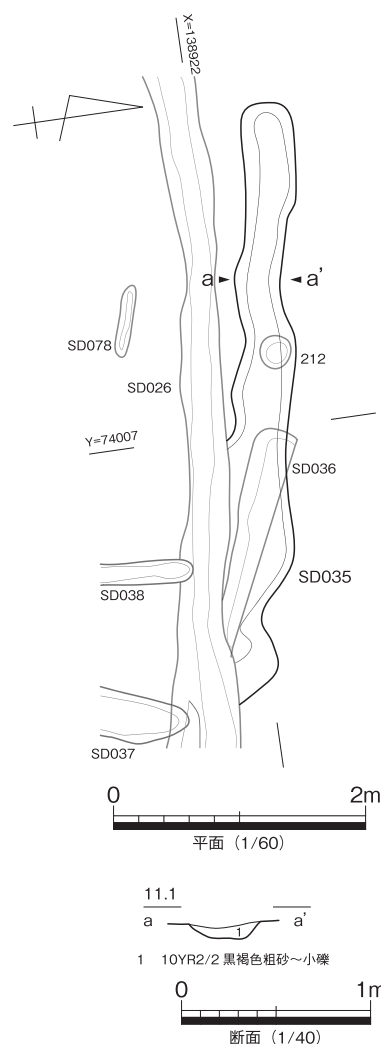
遺物は、弥生土器甕等の土器小片が40点程度出土した。凶化した遺物はない。出土遺物は、重複するSR01ないしSR02からの混入の可能性が考えられる。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、1面で検出されSD027より先行することから、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD027・SD028（第173図）

1区1面中央部付近で検出した南北直線溝で、断続的に検出され、調査時には各々に遺構名が付されていたが、一連の溝として報告する。南端は調査区内で途切れ、北端は攪乱により切られ、攪乱の北側で延長溝は確認されなかった。南北長約17.3 mを調査した。

また、中央やや南でSD028が西に分岐し、1.4 m程延びて途切れる。重複関係より、SD026より後出する。検出面幅0.27～0.31 m、残存深0.07～0.16 mを測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は、1～2層に細分され、主に黄橙色粘質土がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、10.8～10.9 m前後を測り概ね一定する。

遺物は、弥生土器甕や器種不詳の須恵器等の土器小片が30点程度出土した。出土遺物の大半は、SR01やSR02からの混入とみられる弥生土器が占める。958は土師質土器杯。底部は回転糸切りである。出土遺物より本溝は、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。



第174図 SD035 平・断面図

SD035（第174図）

1区1面中央部付近で検出した東西溝である。東端はSD026に切られ、SD026の東側で延長溝は確認されなかった。西端は調査区内で途切れる。上面よりSD036が穿たれる。延長約4.3 mを調査した。溝は、検出面幅0.4 m前後、残存深0.10 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色粗砂～小礫の単層であった。溝底面の標高は、10.9 m前後で一定する。

遺物は、器種不詳の土器小片2点と、炭化材小片が少量出土した。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、1面で検出されSD026より先行することから、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD066（第175図）

1区南西隅付近で検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、北西から南東に配される。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長する。東西長約5.8 mを調査した。2区南東隅付近で検出したSD093等の延長溝の可能性はあるが、一連となる溝を特定できないため、個別に報告する。

溝は、検出面幅0.3m前後、残存深0.1m、断面形はU字状。埋土は、黄橙色粘土のブロック土で占める。溝底面の標高は、西端付近で11.2m前後、東端付近で11.15m前後をそれぞれ測り、高低差より南東方向へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土器小片3点が出土した。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。後述するSD084に後続する、丘陵縁辺部に開削された水路群の1条として位置付けられることから、当該期の遺構として報告する。

SD067(第175図)

1区南西隅付近で検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、北西から南東に配される。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長する。東西長約2.2mを調査した。2区南東隅付近で検出したSD093等の延長溝の可能性はあるが、一連となる溝を特定できないため、個別に報告する。溝は、検出面幅0.6m前後、残存深0.03m前後、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はなく、また調査区南壁にも該当する堆積層は記録されていない。溝底面の標高は、11.3m前後で一定する。

遺物は、器種不詳の土器小片3点が出土した。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。本溝も、SD084に後続する水路群として、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD068(第175図)

1区1面南西隅付近で検出した溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、北西から南東方向に配される。西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れる。東西長約4.5mを調査した。本溝も、2区南東隅付近で検出したSD093等の延長溝の可能性はあるが、一連となる溝を特定できないため、個別に報告する。溝は、検出面幅0.6m前後、残存深0.3m、断面形は逆台形である。溝底面の標高は、11.2m前後で一定する。

遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。本溝も、SD084に後続する水路群として、当該期の遺構の可能性を想定する。

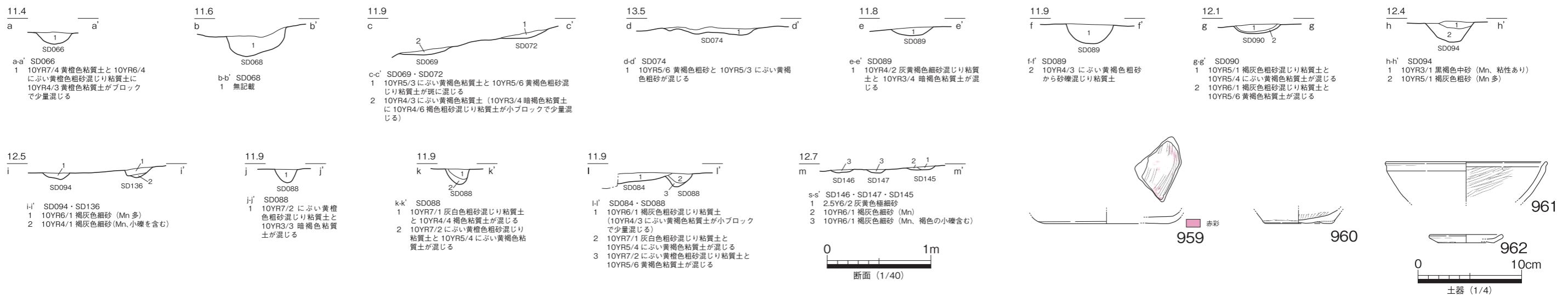
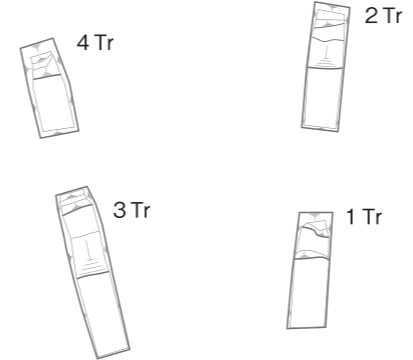
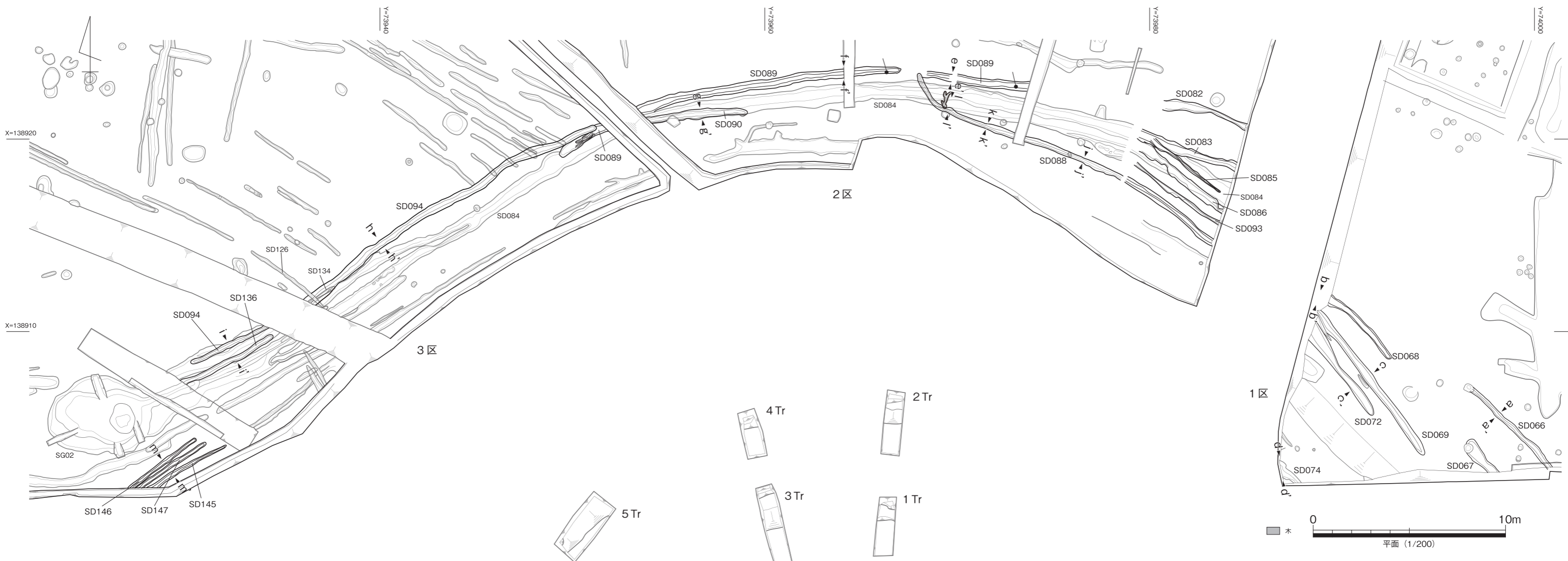
SD069(第175図)

1区1面南西隅付近で検出した溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、北西から南東方向に配される。西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れる。東西長約9.3mを調査した。本溝も、2区南東隅付近で検出したSD093等の延長溝の可能性はあるが、一連となる溝を特定できないため、個別に報告する。溝は、検出面幅0.4m前後、残存深0.05m、断面形は緩いU字形。埋土は、偽礫含む黄褐色粘土である。溝底面の標高は、11.5m前後で一定する。

遺物は、土師質土器皿等の小片数点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物は、13世紀代を中心とした時期に位置付けられ、本溝もSD084に後続する水路群として、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD072(第175図)

1区1面南西隅付近で検出した溝である。1・2区南側の丘陵縁に沿って、北西から南東方向に配さ



第 175 図 SD066 ~ SD069・SD072・SD074・SD082・SD083・SD085・SD086・SD088 ~ SD090・SD094・SD136・SD145 ~ SD147 平・断面・出土遺物実測図

れる。西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れる。東西長約 5.4 m を調査した。本溝も、2 区南東隅付近の SD093 等の延長溝の可能性はあるが、一連となる溝を特定できないため、個別に報告する。溝は、検出面幅 0.3 ～ 0.7 m、残存深 0.05 m、断面形は緩い U 字形。埋土は、粗砂混じりの黄褐色粘質土。溝底面の標高は、11.7 m 前後で一定する。

遺物は、土師質土器皿の小片 2 点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物は、13 世紀代を中心とした時期に位置付けられ、本溝も SD084 に後続する水路群として、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD082 (第 175 図)

2 区南東隅付近で検出した東西溝である。1 ～ 3 区南側の丘陵縁に沿って、緩やかにやや北に弧を描いて配される。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。延長約 4.5 m を調査した。溝は、検出面幅 0.18 ～ 0.56 m、残存深 0.03 m、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はない。

遺物は、土師質土器皿等の小片 3 点が出土した。図化した遺物はない。出土した遺物は概ね 13 世紀代を中心とした時期に位置付けられると考えるが、詳細な時期については不詳である。SD084 に後続する水路群として、当該期の遺構として報告する。

SD083 (第 175 図)

2 区南東隅付近で検出した東西溝である。1 ～ 3 区南側の丘陵縁に沿って、やや蛇行しつつ配される。重複関係より、SD084 より後出し、SD085 より先行する。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。延長約 5.9 m を調査した。溝は、検出面幅 0.30 ～ 0.59 m、残存深 0.11 m、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はない。

遺物は、土師質土器皿等の小片 10 点程度が出土した。図化した遺物はない。出土した遺物は概ね 13 世紀代を中心とした時期に位置付けられると考えるが、詳細な時期については不詳である。SD084 に後続する水路群として、当該期の遺構として報告する。

SD085 (第 175 図)

2 区南東隅付近で検出した東西溝である。1 ～ 3 区南側の丘陵縁に沿って、概ね直線状に流路方向 N 52.5° W に配される。重複関係より、SD083 や SD084 より後出する。東西両端は調査区内で途切れる。延長約 4.4 m を調査した。溝は、検出面幅 0.15 m 前後、残存深 0.04 m 前後、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はない。

遺物は、器種不詳の土器小片 1 点が出土した。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、SD084 に後続する水路群として、当該期の遺構として報告する。

SD086 (第 175 図)

2 区南東隅付近で検出した東西溝である。1 ～ 3 区南側の丘陵縁に沿って、概ね直線状に流路方向 N 50.44° W に配される。重複関係より、SD084 より後出する。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。延長約 5.3 m を調査した。溝は、検出面幅 0.18 ～ 0.46 m、残存深 0.05 m 前後、断面形は浅い皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録はない。

遺物は、土師質土器皿や器種不詳の須恵器等の小片 10 点程度が出土した。959 は、赤彩土師器杯の

底部片である。器表面はマメツのため、調整等は不明。8世紀代を中心とした時期に位置付けられ、本来は重複するSD093に帰属する可能性が高い。出土した遺物は、図示した遺物等を除いて、概ね13世紀代を中心とした時期に位置付けられると考えるが、詳細な時期については不詳である。SD084に後続する水路群として、当該期の遺構として報告する。

SD088 (第175図)

2区2面南東隅部付近で検出した東西溝である。2区トレンチ21～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかに北に弧を描いて東西に配される。東端は調査区外へ延長し、西端は屈曲して北西方向へ折れ、調査区内で途切れる。東西長約18.0mを調査した。重複関係より、SD084より先行する。検出面幅0.35m前後、残存深0.12～0.15m、断面形はU字状を呈する。埋土は1～2層に細分され、灰色系ないし黄色系粘質土がそれぞれレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、11.7m前後で一定し、流下方向については不明である。

遺物は、器種不詳の須恵器や土師質土器皿等の小片5点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物やSD084より先行することから、本遺構は13世紀代を中心とする時期が想定されるが、詳細な時期については不詳である。

SD089 (第175図)

3区1面南東隅付近から2区南端付近において検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかに北に弧を描いて東西に配される。東西両端は調査区内で途切れ、延長約25.2mを調査した。重複関係より、SD084より後出し、SD094より先行する。溝は、検出面幅0.5m前後、残存深0.19m前後、断面形は概ね碗底状を呈する。埋土は、黄褐色粘質土の単層であった。溝底面の標高は、西端付近で12.05m前後、東端付近で11.60m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、弥生土器甕や須恵器、土師質土器皿や杯等の小片が40～50点程度出土した。**960**は土師質土器杯の底部片。底部は回転ヘラ切り後、周縁に高台状に粘土が貼付されている。**961**は黒色土器A類碗の口縁部片。口縁端部は小さく外反する。10世紀代に位置付けられ、SD093からの混入の可能性が高い。出土遺物より本遺構は、概ね13世紀代を中心とした時期に位置付けられるが、詳細な時期については不詳である。

SD090 (第175図)

2区南西隅部付近で検出した溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかに北に弧を描いて東西に配される。東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外へ延長するが、3区で延長溝は確認していない。東西長約5.1mを調査した。重複関係より、SD084より後出する。溝は、検出面幅0.5m前後、残存深0.09m前後で、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分され、上位層は下位層上面より掘り込まれており、改修の可能性も考えられる。溝底面の標高は、11.9m前後で一定する。

遺物は、器種不明の土師器や須恵器等の小片が10点程度出土した。図化した遺物はない。出土遺物とSD084より後出することから、13世紀代を上限とする時期に位置付けられるが、より詳細な時期については不詳である。SD084に後続する当該期の水路として報告する。

SD094 (第 175 図)

3区南東隅付近で検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかにやや北に弧を描いて配される。東西両端は調査区内で途切れる。延長約24.6mを調査した。重複関係より、SD084より後出する。溝は、検出面幅0.4m前後、残存深0.06～0.20m、断面形は浅い皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、褐色系細～粗砂がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、西端付近で12.34m前後、東端付近で12.0m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に、弥生土器甕や器種不詳の須恵器、黒色土器、土師質土器皿や杯、和泉型瓦器碗等の小片が40点程度出土した。962は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。出土遺物や切り合い関係からSD084に後続する当該期の水路と考える。

SD136 (第 175 図)

3区南西隅付近で検出した東西溝である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、概ね流路方向N 62.27° Eに配される。東西両端は調査区内で途切れ、延長約5.2mを調査した。重複関係より、SD084より後出する。溝は、検出面幅約0.28m、残存深0.1m前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は2層に細分され、上述したSD094に酷似した褐色系細砂が水平堆積していた。溝底面の標高は、12.33m前後で一定する。

遺物は、器種不詳の土器と須恵器の小片各1点が出土した。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、SD084より後出する当該期の水路と考える。

SG02・SD084 (第 176～182 図)

SD084は3区1面南西隅から2区南東隅で検出した溝で、西端に溜め井SG02が付設する灌漑水路である。1～3区南側の丘陵縁に沿って、緩やかに北に弧を描いて東西に配される。SG02を含めた東西長約66.7mを調査した。重複関係より、SD083やSD085、SD086、SD089、SD090、SD094、SD136より先行し、SD088より後出する。

SG02は、長径約5.60m、短径約4.05m、平面形は東西に長いやや歪な楕円形を呈する。残存深は約1.05mで、掘り方は3段に掘り込まれ、底面は概ね平坦であった。検出面より0.5～0.6m下位の第2段目のテラス面上に、長さ約0.95mと約1.15m、径0.15～0.20mの2本の丸太材を、SD084との接続部側から北側にかけてL字状に組み、その南西側をさらに0.5m前後、土坑状に深く掘り下げて湧水部とし、その西寄りに曲物1基を据え置いていた。湧水部の底面の標高は11.5m前後で、調査時にはグライ化して湧水部のベース層は青灰色を呈していたとされる。曲物は掘り方底面に接して置かれ、周囲には湧水部を埋めるように暗灰黄色中砂(第167図i断面12層)が堆積していた。湧水部にオープンな状況で曲げ物のみを設置したとは考え難く、おそらくは暗灰黄色中砂は曲物周囲を埋める人為的な埋戻し土の可能性が考えられる。曲物を設置し、その周囲を埋め戻すことで、湧水部壁面に露出した透水層の浸食を防ぎ、安定して湧水を確保することを意図したものと考える。なお曲物の上面には、黒色粘土(同図11層)等がレンズ状に自然堆積していることから、曲物は当初より1段のみが据え置かれていたと考えられる。

SD084の底面は、SG02の2段目のテラス面とほぼ同位置にあり、湧水は丸太材の南側あるいは丸太材の上面より、SD084へ流下していたと考えられる。丸太材の機能としては、湧水部への土砂の流入を防ぐ土留めの機能が想定されるが、湧水部の四周を囲うようには据え置かれてはいない。またSG02の

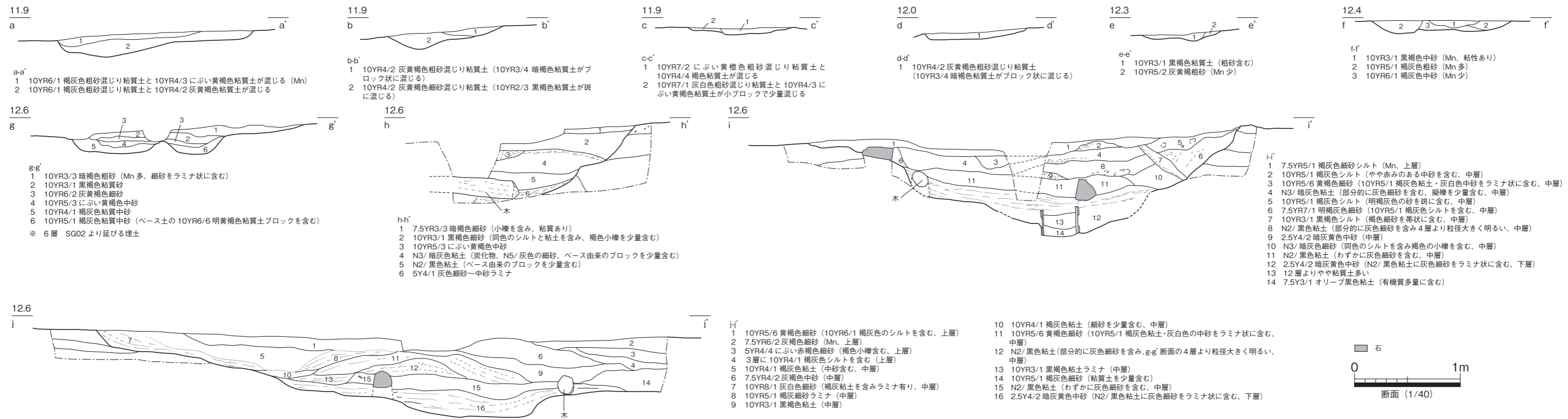
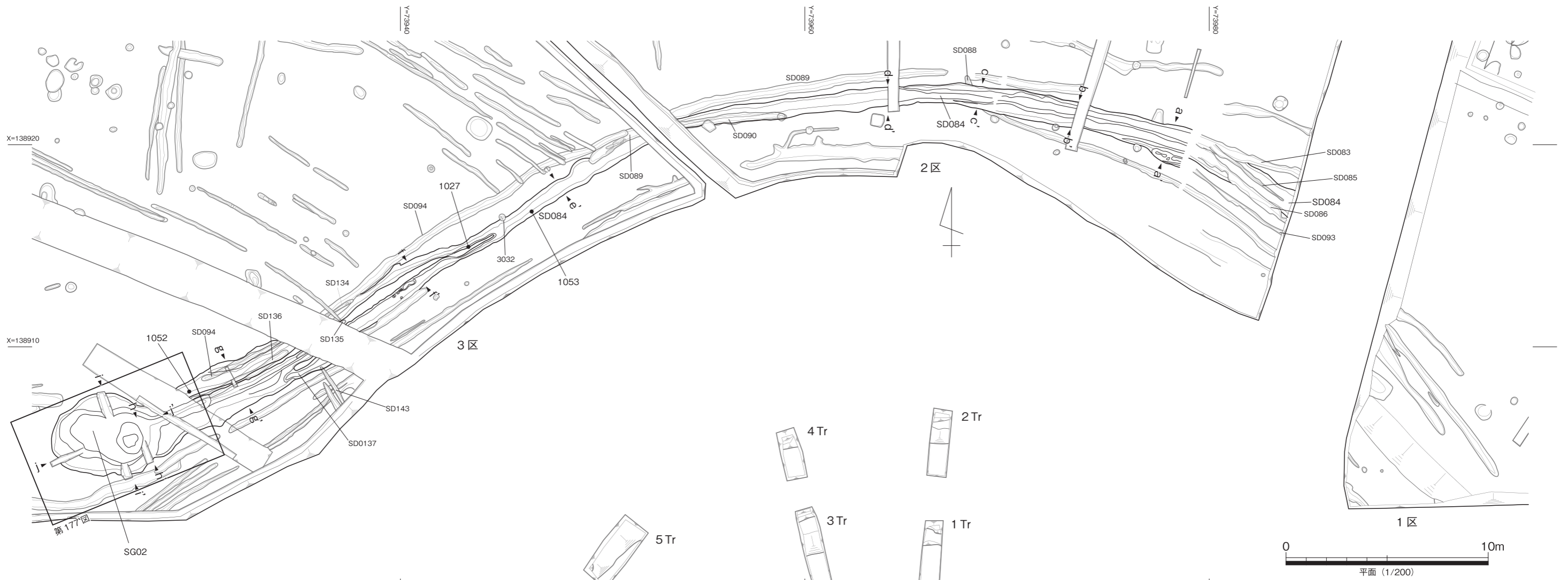
湧水部は掘り方の東に偏在し、西にテラス面が広く掘り込まれているが、これは湧水を一時的に貯水する機能を意図したものと考えられる。L字状の木組みは、土留めの機能と共に、SD084への水量の調節機能をも併せ有していた可能性も想定される。

SD084の埋土は14層(同図j断面)に細分され、3層に大別し、遺物の取り上げ等がなされている。下層(同図12層)は、2段目のテラス面より下を埋める堆積層で、ラミナ堆積がみられることから、SG02機能時の流水下の堆積物であろう。下層の堆積により、曲物を含めた湧水部はほぼ埋没しており、溜め井の機能は大きく減退したものと考えられる。しかし上～中層(同1～11層)においても、ラミナ堆積を含む灰色系細～中砂や黒色粘土等がレンズ状に堆積を繰り返しながら埋没が進行しており、SG02埋没後も流水と滞水を繰り返しながら、徐々にSD084の埋没が進行した可能性も考えられる。

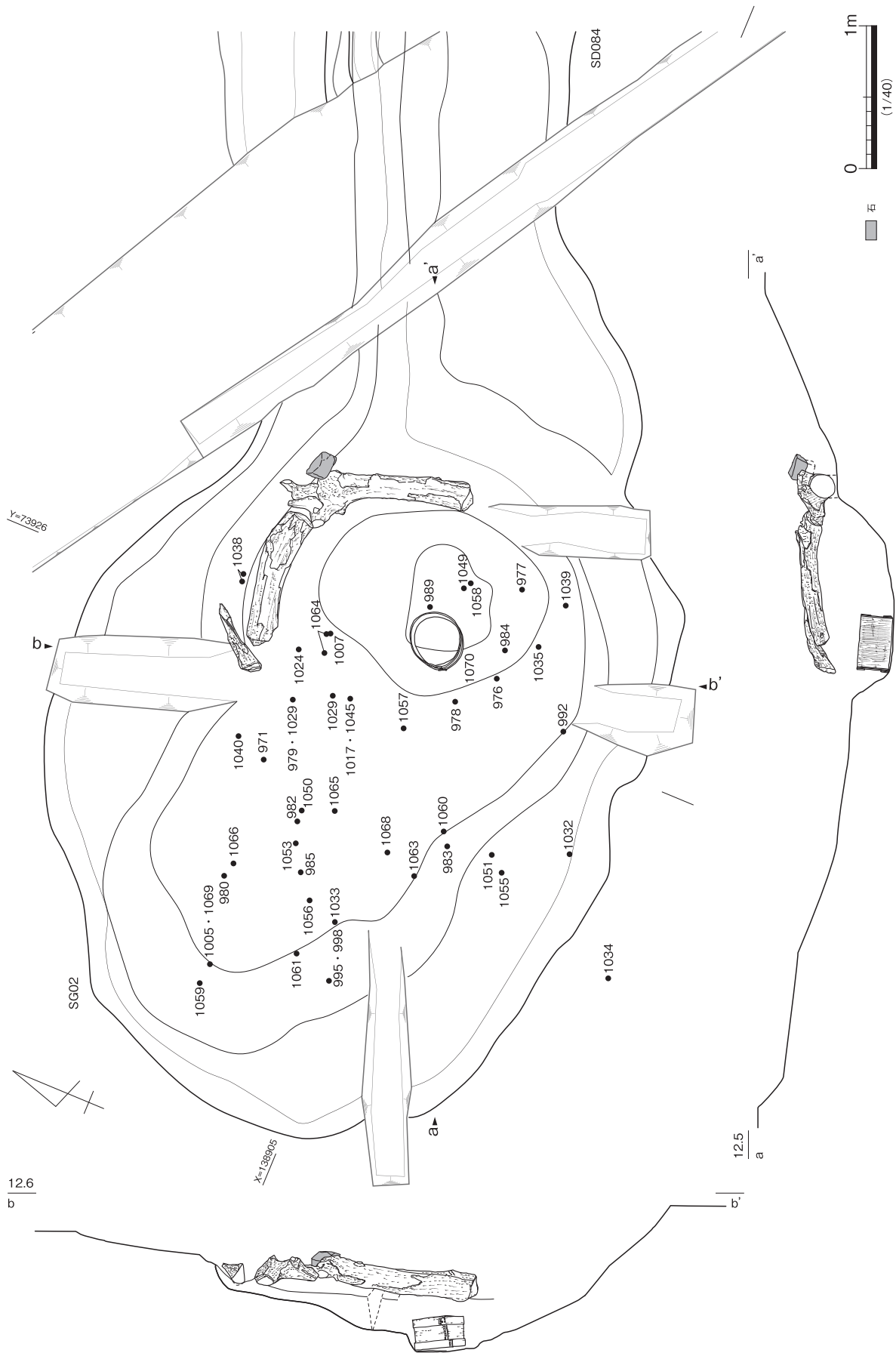
SD084の検出面幅は、SG02との接続部で2.6m前後、東側の2区で0.35m前後と、3区西半部と東半部以东とは大きく相違する。SG02に接する延長約19.3mの範囲には、底面中央に幅約0.3m、高さ約0.12mの畦状の高まりが流路方向に沿って検出され、溝底面は幅約0.8mと同0.5mの並走する2条の溝に分割される(同図g断面)。同図f断面では、北溝の埋土である褐灰色粗砂(2層)が褐灰色中砂(3層)の上面より掘り込まれて堆積しており、改修の可能性が考えられ、また同時に南溝部分にも2層が堆積していること等より、当初は1条の溝として開削された後に、拡幅して2条の溝に改修された可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、土器小片がコンテナ7箱程度出土した。972・994・1026・1034がSG02上層、963・964・971・979・980・982・983・985・992・995～998・1004・1005・1012・1014・1016・1021・1029・1032・1033・1035・1038・1046・1048・1060・1061・1066・1067・1069が同中層、966・976～978・984・987・989・993・1000・1002・1007・1017・1019・1024・1025・1039・1040・1045・1049・1050・1054・1059・1062・1064・1065・1070が同下層、967・968・969・970・973・974・975・981・986・988・991・999・1001・1008・1009・1011・1013・1015・1018・1022・1030・1031・1036・1037・1042・1043・1044・1047・1051・1052・1053・1055・1056・1057・1058・1063・1068が同層位不明、965・990・1003・1006・1010・1012・1020・1023・1027・1028・1041がSD084出土のそれぞれ遺物である。SG02中・下層への土器や木製品等の廃棄が顕著に認められ、溜め井機能の減退と共に、生活残滓の廃棄場所として利用されたと考えられる。

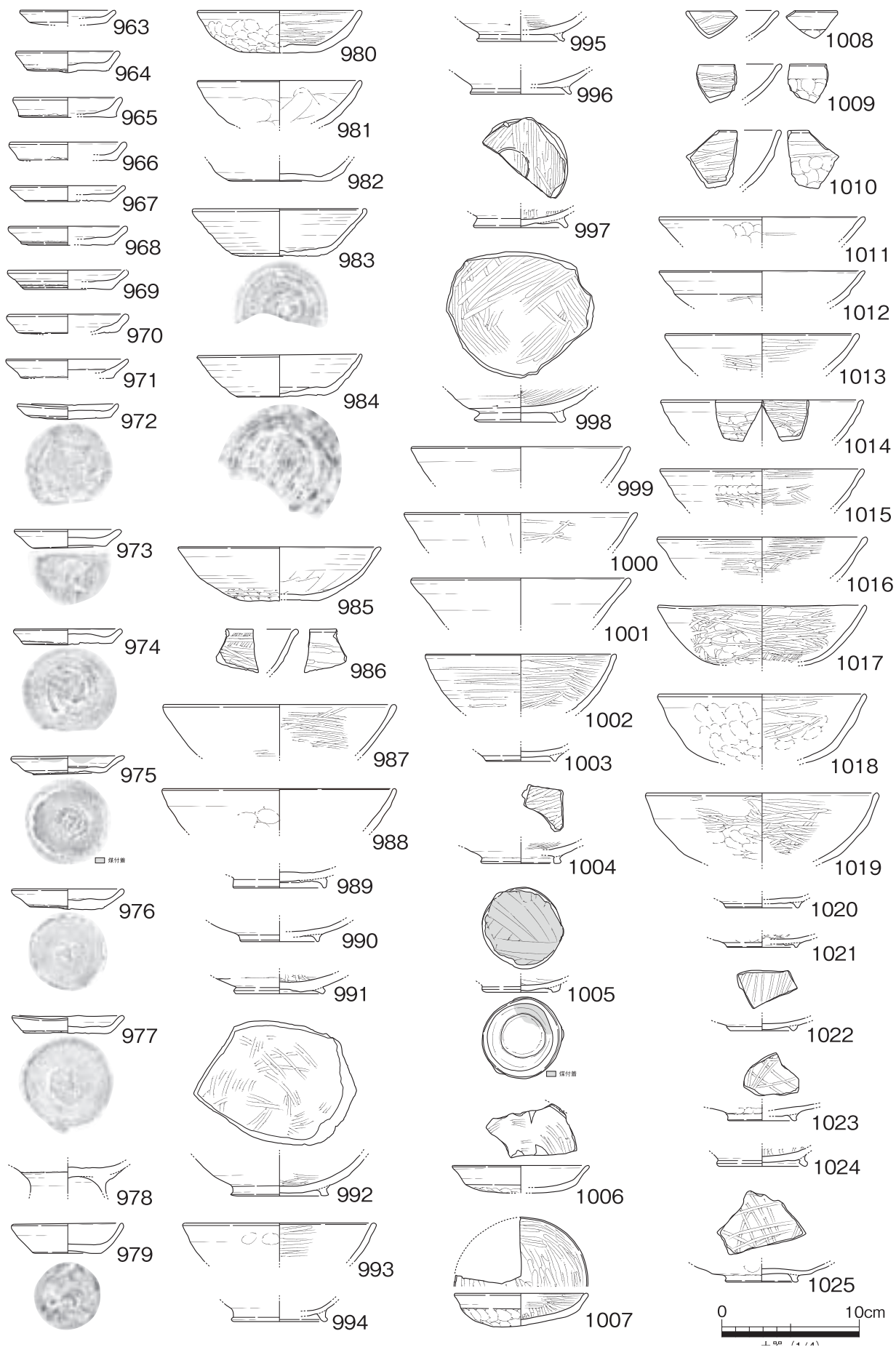
963～977は土師質土器皿である。底部は973の回転糸切り以外は、確認できるものはすべて回転ヘラ切りである。978は土師質土器台付杯の脚部片。10～11世紀代に位置付けられ、SD093等からの混入資料であろう。979は須恵器皿。SG02中層より完形の状態で出土した。底部は回転糸切りで、東播等の他地域からの搬入品であろう。980は土師器杯。2片に割れて出土した。底部側の破片の器表面にのみ薄く煤が付着し、破損後に被熱したと考えられる。981も土師器杯で、調整等より979と同一個体の可能性があるが、接合しないため別個体として図示した。982～984は土師質土器杯。底部はいずれもヘラ切りで、982はヘラ切り後ナデ調整を加える。985は綾川町十瓶山周辺窯産の須恵器杯。986～992は、土師質土器碗である。器表面のマメツが顕著で、調整等が不明瞭な資料が多い。993～998は黒色土器A類碗である。997の外面には、2次的被熱による煤が薄く付着する。999・1000・1002・1003は、十瓶山周辺窯産の須恵器碗。1001は土師質土器杯、1004・1005は黒色土器碗。1003は焼成不良により、外面は黄色を呈する。1001と1005の内外面には、2次的な被熱による煤が付着する。1006と1007は、和泉型瓦器皿である。1007の内面見込みには、平行線状のミガキを施す。1008～



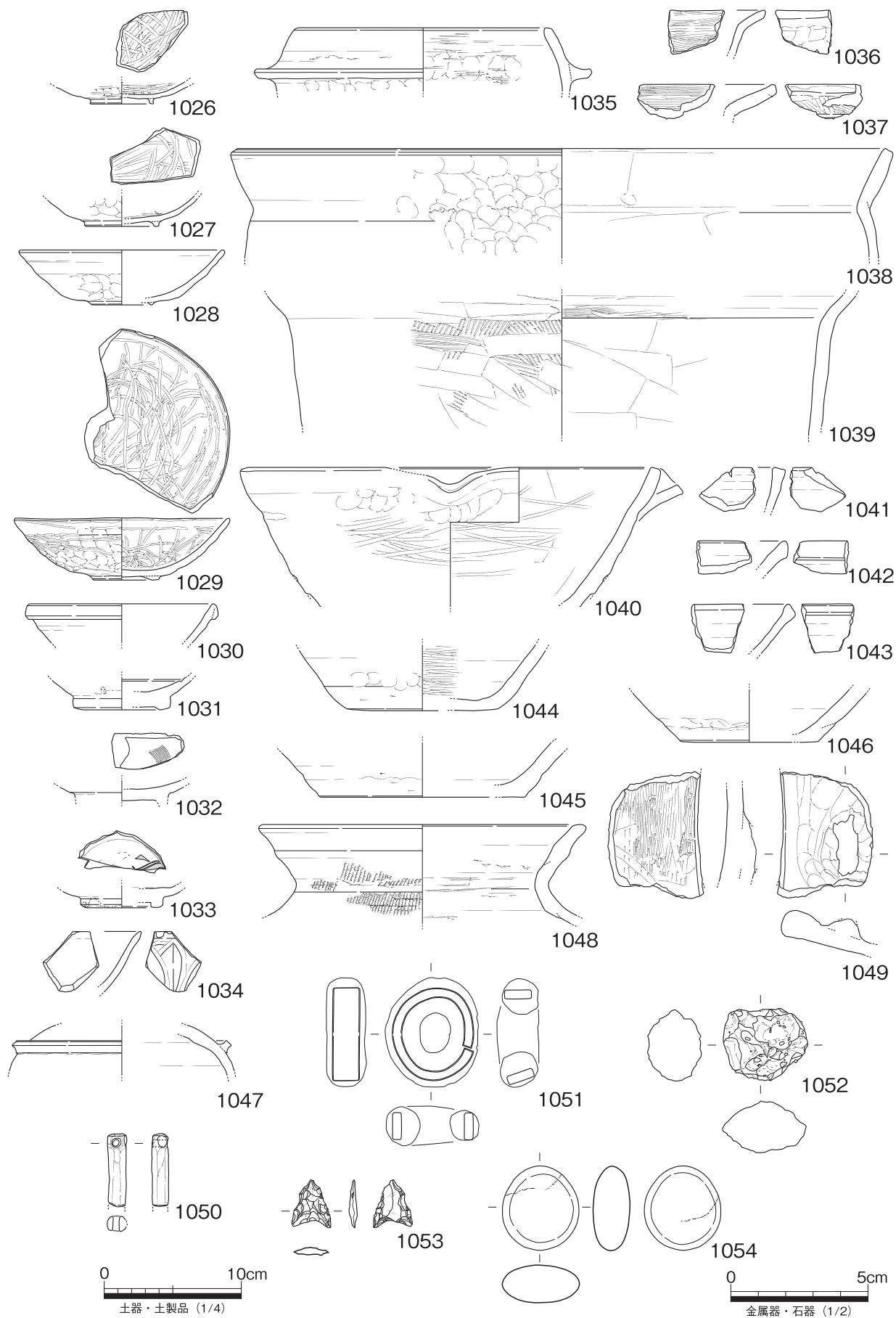
第176図 SG02・SD084 平・断面図



第177図 SG02平・立面図



第178図 SG02・SD084出土遺物実測図1



第179図 SG02・SD084 出土遺物実測図2

1023・1025～1029は同碗である。**1024**は黒色土器碗。碗の見込みには、平行線状ないし斜格子状のミガキが施される。**1018**は焼成不良品で、内外面に炭素の吸着は弱く、器表面はマメツする。瓦器碗には、Ⅱ-3期～Ⅲ-3期までの時期幅がみられる。**1030～1032**は白磁碗。**1030**は大宰府分類の椀Ⅳ類、**1031**も見込みに沈線を有することから、Ⅳ類であろう。**1032**は見込みに櫛目文を施し、椀Ⅴ-4類に分類される。**1033**と**1034**は龍泉窯系青磁碗。**1033**は高台形状と見込みの片彫文より、浅形椀Ⅰ類とみられる。**1034**は外面に鎬蓮弁文を施す、椀Ⅱ類である。

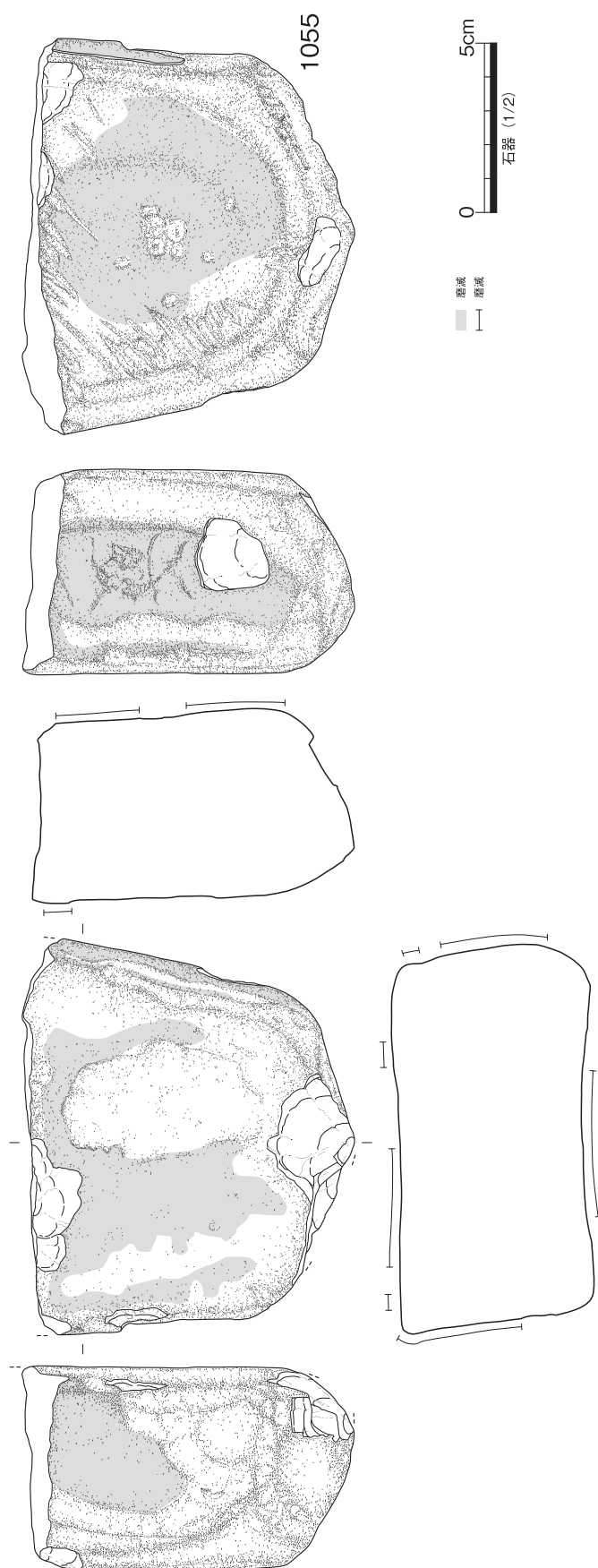
1035は、土師質土器羽釜。外面には煮こぼれとみられる炭化物が薄く付着する。**1036～1038**は土師質土器鍋である。いずれも外面には使用時の煤が付着する。**1039**は口縁部を折損するが、直線状に外傾して開く体部形状より土師器甕として報告する。SD093からの混入品であろう。**1040**は、十瓶山周辺窯産の須恵器片口鉢である。内外面にミガキ調整を施す。**1041～1043**は同鉢の口縁部小片。口縁部形状より、**1041**は十瓶山周辺窯産、端部を肥厚する**1042**と**1043**は東播産とみられる。**1044～1046**は同鉢の底部片。**1044**は内面にミガキ調整が施され、十瓶山周辺窯産とみられる。**1045**は内面がよく使い込まれてマメツする。**1046**は焼成不良品で、器表面はマメツが進むが、底部糸切りの可能性があることから東播産とする。

1047は、肩部に断面矩形の突帯を貼付する壺の体部片である。播磨産の搬入品の可能性を想定する。**1048**は須恵器甕。口縁部は叩き出しの可能性があり、外面口縁部下半に体部より連続する細筋のタタキ痕を認める。SD093からの混入品であろう。**1049**は土師器カマドの焚口部の小片。**1050**は土師質焼成の棒状土錘である。胎土中に角閃石粒を含み、搬入品の可能性が高い。

1051は、幅0.9cm、厚さ0.3cmの板状の素材を、長径3.3cm、短径2.9cmの平面不整楕円を呈する環状に加工した鉄製品である。用途は不明。**1052**は鉄滓で、椀形鍛冶滓の破片とみられる。

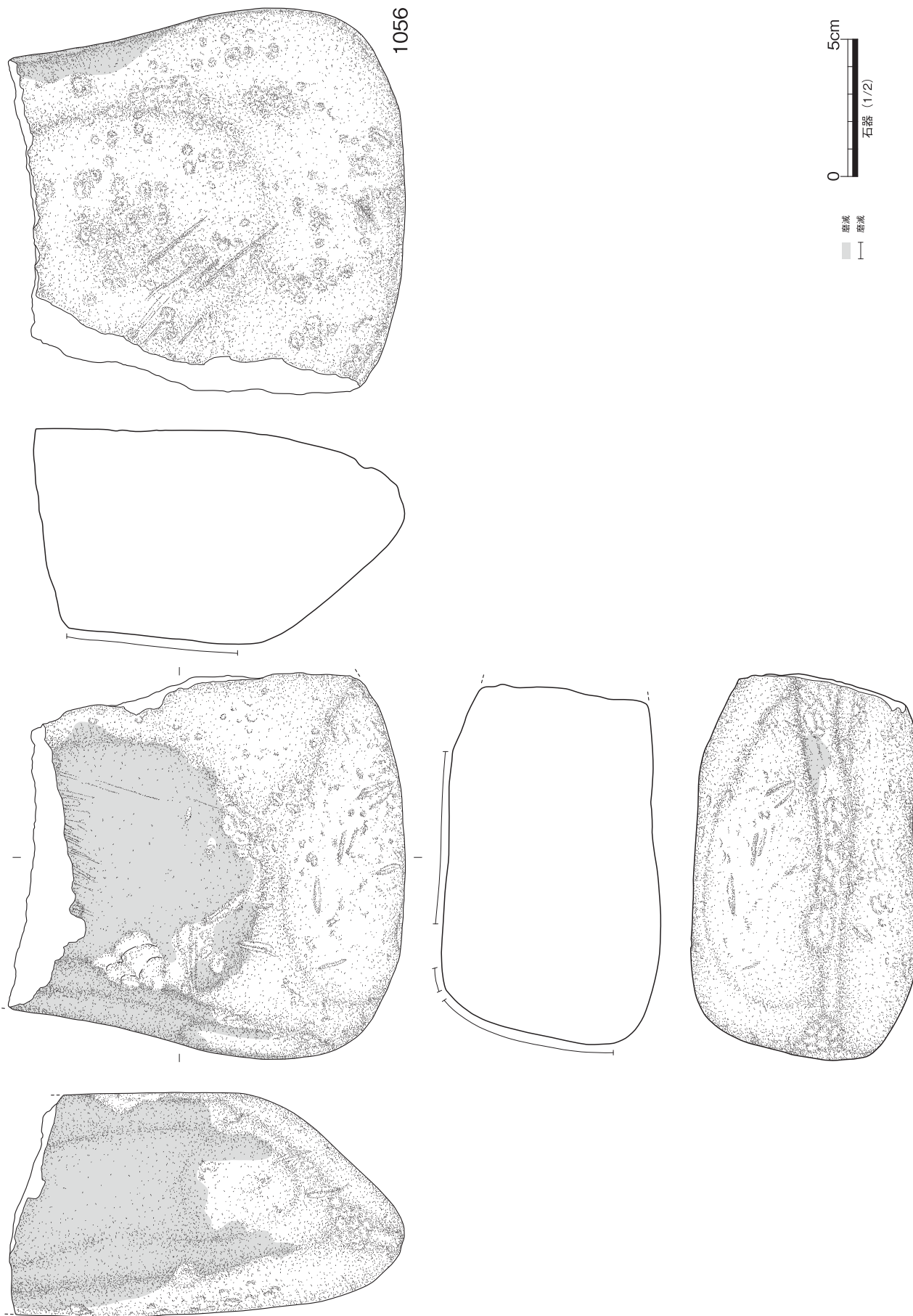
1053はサヌカイト製の凹基式石鏃。**1054**は、長径3cm前後、厚さ約1.3cmの石英の円礫で、基石の可能性を考える。**1055**は、厚さ約5cm、幅11.4cm以上の砂岩の板状亜角礫を使用した砥石である。表裏両広端面と左右両側面を砥面として使用する。また図右端面を中心に、アバタ状ないし線状の敲打痕が認められ、叩き石等として利用された可能性がある。図上端は使用時もしくは使用後に折損し、図左広端面や左右両側面は、被熱により赤変し、薄く層状に剥離している。**1056**は、厚さ約8cmの安山岩の板状亜円礫を使用した砥石である。図左広端面と左側面は、光沢を有するほどによく使い込まれており、また図右広端面にも弱い使用痕を認める。表裏広端面には、アバタ状ないし線状の敲打痕が見られ、叩き石としても転用されている。図上半と右側縁部は、使用中もしくは使用後に折損している。また、破断面を含め、2次的な被熱による黒化や煤の付着が見られる。

1057～1070は木製品である。**1057**は平椀である。内面に一部黒漆が残存する。口縁部と高台端部を欠損し、埋没時の土圧のため大きく変形する。図は一部復元して作図した。高台内は浅く削られ、外周に浅い溝が彫られている。こうした特徴から、12世紀代に位置付けられる(宮崎ほか1989)。樹種はカツラ科カツラ属カツラ(第4章第2節参照)。**1058**は、幅2.1cm、厚さ1.6cmの棒状の木製品で、図下半部を折損する。図中央の左側辺は直線状を、右側辺はやや弧状を呈する。表面は加工後研磨されたのか、加工痕はみられない。用途は不明、刀形か。コナラ属クヌギ節(第4章第3節参照)。**1059**は、幅4.5cm、厚さ0.5cmの板状の木製品で、図下半部を折損する。上縁と両側縁は弧状を呈する。表裏面には、主軸に斜交する刃痕を認める。用途不明。ヒノキ。**1060**は、最大幅5.15cm、厚さ0.7cmの板状の木製品である。上下縁は直線状に切断され、両側は括れる。用途不明、端材か。ツガ属。**1061**は、幅2.15cm、



第180図 SG02・SD084 出土遺物実測図3

厚さ1.85cmの棒状の木製品で、図下半部を折損する。表裏広端面と上端面は炭化しており、両側面は炭化後加工を加える。なお、右図広端面は表面が薄く剥がれ、炭化面の残りは悪い。用途不明。カヤ。**1062**は、幅0.85cm、厚さ0.35cmの細い棒状材。上下端を折損する。用途不明、端材か。ツガ属。**1063**は、最大幅2.4cm、厚さ0.25cmの薄い板材で、図上端は折損する。両側に0.5cm程度の台形状の抉りがみられる。用途不明。ツガ属。**1064**は、0.5～0.6cm角の棒状材で、上下端は細く尖る。用途不明。ウツギ属。**1065**は、幅1.7cm以上、厚さ0.6cmの板材で、両側辺と図下端部を折損する。図上端部は強く炭化している。用途不明、端材か。マツ属複維管束亜属。**1066**は、幅1.5cm以上、厚さ1.2cmの板状の木製品で、左図左側縁及び上下端を折損する。用途不明、端材か。マツ属複維管束亜属。**1067**は木杭で、上下端は折損する。下端には、刃幅2.5cm以上のヨキ痕を下端より9cm以上に認め、周縁を細かく削り尖らせる。マツ属複維管束亜属。**1068**は、長径5.3cm、長さ13.0cmの芯持ち丸木材。上下端は、刃幅3cm以上のヨキにより細かく削り、中央側面に幅約3.5cm、深さ0.7cmの抉りを施す。舟形の可能性もあるが、用途不明。トネリコ属シオジ節。**1069**は、長さ12.2cm、径3.2～3.9cmの節を抜いた竹製品で、図上端は長軸に対して水平に切断し、下端は両側より細かく削り尖らせる。用途不明。**1070**は、SG02の湧水部底面に据えられた、内径約35cm、高さ約20.8cmの円形曲物で、底板は外されている。綴じ方は、上下に箍がはめられているため不明な点はあるが、1列内6段綴じとみられる。樺皮は幅約1.0cmで、正面左側に綴じ位置を決める刻線が引かれる。箍はいずれも幅約3.8cmで、上方の箍は正



第 181 図 SG02・SD084 出土遺物実測図 4